

物狂いの石

草原克芳

1

うらかな天気の良い休みの日など、私はその地方都市の中心部にある城址公園を、しばしば訪れた。

晩春の日曜日。その日も薄い乳色の曇り空が、市街地全体を覆っていた。市役所の向こうに広がる城址公園では、堀割の緑の水が、白い雲をほんやりと映していた。この城跡は、何年か前にかつての姿を一部再現されたものだが、櫓が二棟あるだけで、天守閣もなく、どこか間延びしたものであった。

なだらかに芝生が広がる広場では、父親と子供がバドミントンをしており、少し離れたところで母と娘が腰を下ろ

していた。関東ローム層の砂塵をふくんだ埃っぽい風がときおり吹いて、落ちていく紙片やビニール袋を舞い上げていた。のどかそうに見える風景の中には、私自身の憂鬱がうっすらと混じっていた。

——そのときすでに、ステッキをついた黒い影が私の方を覗んでいるのを感じていた。黒い小さな丸メガネをかけた孤独なその雰囲気から、盲人でもいるのだらうと思った。四十代で会社をつぶして都落ちしてきた私は、ここ数年、北関東の地方都市の女房の実家に世話になっていた。インテリアや輸入雑貨系の通販会社で、グループの親会社から分社した形で出発したが、大赤字を出してしまい、出資してくれた社長と、一部の金を借りた知人や、静岡の親類に

頭を下げた。居場所もなくなりローンが途中のままの練馬のマンションを引き払い、この街の家内の実家で、細々と世話になっている状態だ。

いまは中学の校長をしていた妻の父親の口ききで、市内のある食品企業を紹介され、その工場で、毎日、在庫管理などの単純なパソコン作業をやっている。

しばらくお堀に張った明るい鶯色の水面を眺めていると、先程、盲人だと思った男が近づいて来た。

黒っぽい服を着た険しい顔をした六十代ぐらいの男で、ハンチングの後ろから、粗い銀髪をばさばさと逆立て、こちらを執拗に覗んでいるのに、ギョツとした。

そのときが彼とはじめての出会いであった。光沢のある赤茶けたステッキを斜めに伸ばしながら、忍び足のような足取りで、一足一足、忍び寄って来られたのである。

胴体は幅広くずんぐりしているのに、手足は細長く不安定で、ハンチングの影に小さな目が光り、どことなく不穏な気配があった。

男は黒メガネを外して、ジロリとこちらを覗んだ。

「貴方、この土地の方ですか」

目が合うと、まず、そういった。私はとりあえず否定した。

「この城の歴史に、ご興味がありますか」

目つきは鋭く、厚いゴムのような血色の悪い唇に包まれ、銀歯まじりの前歯が突き出している異相であった。その風

貌から、『カリガリ博士』『吸血鬼ノスフェラトゥ』『タランチュラ』などの名前が浮かんだ。私はそのあたりのモノクロ映画の秘かなファンなのである。

とくに興味というほどのものはない、と正直に答えると、相手は首を斜めにひねって、私の反応を慎重にさぐるように切り出した。

「しかしあなたは、先日熱心に見学されておられた」

確かに、始めて間もないブログに、資料館の情報を使おうかと思っ、こそそとメモはしていた。

男は、オサカベ・ケンゾウと名乗った。何かボランティア解説員を示す身分証明書めいた小さなカードを見せられた気もする。私が注意していれば、そこに刑部憲造という名が見えたはずだ。しかしすぐに彼は、内ポケットに引っ込めた。

「すべてが、間違った歴史ばかりなのですよ。学校教育しかり、メディアしかり。嘘の歴史を教えているのは、大化の改新、明治維新や、大東亜戦争ばかりじゃありません」
オサカベ氏は息がかかるほど、顔を近づけた。

「間違っているというのは、どういうことですか」

——そう問い返した瞬間、私はヤツの畏にはまったのだ。つまり、タランチュラの蜘蛛の巣にからめとられた。

「いまでは通俗的な、手垢のついた伝説ということになっている宇都宮釣天井はですな、じつは実在していて、その

首謀者の本多正純の筆書きの設計図の写し図も、伝えられているのです」

変な光を放つ目を、大きく剥いた。何かとてつもない秘密を打ち明けるように。

私は余所者で、そんな地方史には、さっぱり関心がない。もともと静岡生まれで、徳川や本多の話ならば、駿府のある私の故郷の方が本家本元で、こんな北関東くんたりで本多某がどうしようと、大した話ではないように思われた。もつとも歴史に詳しい方ではない。

どちらかという私は、受け身の性格であり、あまり自己主張が得手ではない。いつも職場でも調整役といった性格だ。それを見透かしたように相手は図に乗ってきた。

「今度、特別にその貴重な設計図を、見せてあげましょう。今日に限って持ってきてないのが、実に残念だ。あなたなら、きっとわかる。その古文書は、うちの祖父が戦前、東京の古書店で特別に入手したもののなのです」

「しかし、そんなものがあつたところで、何がどうなるというのですか」

「——人間の心というものを、知るためですよ」

彼の両目は、ここでいっそう義眼のように鋭くぎらついた。何をいつているのだろうこの男は……。

「勉強熱心な方だから、教えてあげるといいます。いまでも、ある研究グループが、この天井裏のからくり細工が

私は作り笑いをしながらも、次第に苛々してきた。

その日は、城址公園内部にある城の石垣の内部空間を利用した資料室にも案内された。

壁には詳細なこの城の歴史年表があり、ガラスケースの中には、城郭と城下町を再現したジオラマが設えてある。小さな樹木や、神社仏閣、青く染められた川もある。しかし天守閣のない城の模型は、大して魅力がなかった。

蜘蛛男がボランティアの案内人だと思っていたところが、その場の中年の係員二人に、我々はよそよそしくも険しい目を向けられた。どうも勝手が違うようだ。

「ごらんさい」と刑部氏はいった。「本多正純は、わずか三年弱の藩主としての期間に、この町の都市計画のおおよその基盤を作った男です。二荒山神社と本丸を結ぶ南北の縦軸を中心に、整然とした町割りを行った」

「町割り……。つまりインフラ整備ということですかね」

私は何とか侮られまいとして、平静を装った。「そう。城の周辺にぐるりと、武家屋敷、町人屋敷を配置した。そして、堀割の外の防衛としての釜川や、田川などの河川工事を進めた。この測量や土木技術などのインフラ・ストラクチャーの知識は、ポルトガル系切支丹からヒントを得たともいわれる。正純の部下には、後に火あぶりにされた岡本大八という切支丹がいたしね」

「確かその頃ですよ、切支丹が弾圧されたのは」

描かれた古い絵図を奪還しようとして、私のことを狙っている」

「はあ。最先端技術でもないのに、ですか」

あえて少し嘲笑的にいった。

「歴史の真実だけではなくて、建設利権が関わってますからね。……ここ数年間というものの、私の周辺に、考えられない事故が数度起こったことが、何よりの証拠なのです。車で跳ねられそうになったのは二度。その後も、家具の位置が変えられているなど、何度か家捜しのような事までされたので、めったなことでは人に見せられないのですよ」

地元の歴史に異様にこだわるマニアックな郷土史家なら、全国どこでもいる。邪馬台国は実はわが郷土にあつた、などの話を吹聴したがる人種である。

そんなものは、たまたま生まれた地元が、日本の歴史の中で重大な役割を演じたと思いたいだけの貧相なローカリズムに過ぎない。私自身はこの蜘蛛男に、直観的にそんないかがわしい匂いを感じた。

このボランティア男の話を聞いているうち、まるで新車の宗教の勧誘に遭っているような、妙な気持ちになってきた。私を、御し易しと見たのか、延々と一時間近くも、ステッキで芝生の根をほじくりながら、そこで歴史談義を聞かされた。セールズで何かの高額商品を購入させるわけでもないのに、それは実に執拗な、理解しがたい情熱であつた。

とりあえず、知ってることを、語らなければならぬ。

「もちろん。しかし、家康も信長同様、禁教令の以前は西欧の先端技術が欲しかった。正純は、後に秀忠に、謀反の疑いで、秘密理の鉄砲製造を糾弾された。しかしこれは、むしろ彼のテクノロジへの嗜好と非凡さを示している。都市基盤を作っておいてもいいながら、この街の間人は、ひどい恩知らずだ。もつと評価されてもよい人物ですよ」

刑部氏はステッキを伸ばして、ジオラマのガラスケースを上からなぞるようにして解説した。それを係員らしき男が、不審そうにうかがっていた。このどこか偉そうな、傍若無人なステッキの使い方は、さすがに係員に失礼だし、不遜な印象を与えらると思う。

後になってから、そこにたむろしている正式なボランティア要員と、この刑部氏との微妙な対立関係も、判明してきた。

人に聞いたところによると、刑部憲造というこの人物は、年齢は六十代半ば、元工務店や、リサイクルショップを経営していた商店主で、あまり芳しくない噂があつた。一種の変人だというのである。

私がかリガリ博士やノスフェラトゥを連想したのは、しかし主観的な印象だけでもないようだった。

この付近の子供たちは、この老人のことを影で「男爵」とか「タランチュラ」とか呼んでいるようだった。義眼のような光を放つギョロ眼玉で、相手を陰険にじいっと睨むむき出しの歯茎に乱杭齒。押しつぶされたようなハンチングからはみ出す、ばさばさの銀髪。

チビたちはこの「男爵」に、自転車やスケートボードで近寄ってきて、パツと逃げてしまう。子供らにも忌み嫌われているようであった。

どうしてそんな古い物語を、いまの子供らが知っているかといえば、最近はまだゲームやアニメのキャラで、往年の映画がリバイバルしているらしいのである。昔のバージョンを基にテイストを幾分かは軽くしているようだ。

私もむかし、映画『タランチュラ』で、深夜の城館の玄関階段を、巨大な毒蜘蛛が不安定な八本脚を使って、ゆらりゆらりと降りてくるシーンを見て怖い思いをしたことがある。

刑部氏が醸し出している雰囲気は、どうもその手の怪奇ものや、前世紀初頭のドイツ表現主義映画を思い出させるのであった。昔の按摩のような黒メガネを取った瞬間の義眼のように光る目や、左右に険しく立ち上がった銀色の髪が、あのモノクロの作りものくさい奇怪な人物を連想させる。鋭い鷲鼻の顔つきも、どこか日本人離れていた。背丈は中背よりもやや高くて肩幅があり、筋骨質の体躯には、

日々溜まっていく鬱屈から逃れ、無聊の気晴らしもあって、秘かにネットのブログを始めた。そして映画と建築関係の本を、図書館で借りてきては耽読した。

私は、都落ちの零落感を自分自身にごまかして、一介のブログ書き、つまり『B級建築―探訪ノート』の管理人にして、素人コラムニストの向坂志郎という自分の役柄に逃げ込んだ。

最初、私の建築趣味は、この街のいたるところにある大谷石という凝灰岩を使った石造建築への興味から始まった。大谷石とは、東京を含めて、関東圏の諸都市によく見られる薄い緑灰色がかった土台石である。松ヶ峰という地区に、空襲でも焼け残った見事なカトリック教会があり、そのネオロマネスク風の石積み建築の写真をブログにアップしているうち、テーマを「あまり注目されていない地方の建築・モニュメント・建造物」ということにしようと思ったのである。この街には、大谷石の石蔵を改造したというレストランや、洒落た喫茶店などもある。

宇都宮から西に約十キロ。採石場のある大谷町では、戦時中に、中島飛行機が地下採掘場で、戦闘機を製作していたらしい。いわゆる学徒動員というやつで、白いハチマキをした女学生たちが地下の穴倉に籠り、飛行機部品を作っていたという。あまり日の当たらない郷土史のような、大学やアカデミズムが見向きもしないような些細な情報は、

首が潰れたように埋まっている。それが傲慢で、偉そうで、自分自身に自足した私の強い印象を与えるのであった。「男爵」というのも、彼が嫌われ者の変人にして、何かしら威厳めいたようなものがあつたからだろう。

会社を潰した後の鬱病めいた精神状態から、私はマイナーな昔の名画や、無声映画時代の古風なモノクロ映画をレンタル・ビデオ屋で掘り出して、深夜こっそりと、ウイスキーを舐め舐め、独りでパソコンに見入り無聊を慰める習慣ができてつあつた。無意味に明るすぎる現代ものは、感性として辛かった。サッカー狂いの中学生の息子の和彦は、私よりも、いつのまにか祖父の方になついている。反抗期の息子に何か小言をいうと、老人は「和彦には、和彦なりの考え方があつたらう」とうそぶく。すると息子はしたりげに、チラリとこちらを見る。憎たらしい。ときどき彼が、小さな悪魔に見えてくる。義父は元中学の校長で、礼儀作法にうるさく、家長然としていた。息子の前で、よく私はこれ見よがしに叱られる。二人の間には、すでに奇妙な同盟ができてつあつた。勝手にしろというものだ。新しい勤務先でも、エクセル関連の機械的な事務をやらされていたが、今後、給料は上がる見込みもない。すでに生きることから降りていた。この退屈な町では、あまり友人というものを作る気がしなかった。

おそらくネット向きの題材なのだ。

昔、徒然草の兼好法師は、心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書きつくれば、怪しうこそ物狂おしけれ、と書いた。『B級建築―探訪ノート』は、生きることを賭けるような代物ではないにせよ、鬱症状の治療のための、ちよつとした退屈のしぎにはなるようだ。

2

しかしこの田舎でクサつていた私も、あの刑部氏と会つてからは、街の歴史に多少の興味がわいてきた。

――手元に古ぼけた地方新聞のモノクロ・コピーがある。十数人ほどの昔ふうの恰好をした商店街の人々が、大きな石の塊を囲んで並んでいる大正期の写真だ。

人の大きさほどもあるこんもりと太った石は、中央にでんと頑固に構えており、斜めに落ちた半円の影には、何か孤独な表情もうかがえる。これは凝灰岩ではない。ごつごつした石の影は、どこかドルメンやストーンサークルのそれのように、太古めいていて厳めしい。人々の好奇心と疑惑に耐えてきた年月が、そんな荒廃した気配を漂わせているのだろうか。

石を囲って、恰幅のいい旦那然とした初老の男、鳶職ふうの痩せた男や、和服をちんまりと着た中年女や、十代のういういしい女学生が、照れくさそうに日射しに眉をひそ

めて笑っている。雑貨屋か何かの店先なのだが、看板の上半分が見えない。新聞特有の粗い印刷の粒子が、灰色の映像を曖昧にしている。

場所は、宇都宮の市街地の中心を、東西に突きぬける大通り、おそらくは馬場町、通称パンバといわれる界隈だろう。この大きな石は、まるで昔の引退した力士が客呼びのための哀れな見せ物になっていたように、昭和初期頃までこの荒物屋の店先に置いてあったという。

これはS新聞という地方紙の古い記事で、刑部氏の話聞いて以降、多少の興味が湧いて、市の図書館の資料室で発見したものである。

これが世にいう「宇都宮城の釣天井」の石、將軍暗殺の凶器そのものなのだそう。記事そのものは、そのように言い伝えられている大岩——というニュアンスで書かれている。

もちろん、いくら何でもこれでは大きすぎるし、この伝説も事実ではない。しかし伝承というものは、民衆のわけのわからないエネルギーを吸い上げて太ってゆくらしく、どうやら戦前のある時期までは、こんな大石が「釣天井」に使われた石として、市内のあちこちにごろごろと散在していたようなのである。そのうち幾つかは、実際に宇都宮城の石垣などに使われていたもので、維新後は、民間や公的な建物の石垣や庭石に使用されていたものだろう。城自

体、もし「釣天井」という將軍暗殺計画があったとしたら、死罪のはずだ。

絵になるといえば何よりも、將軍の暗殺装置としての異様な「天井」の幻想的で奇怪な舞台からくりが、芝居では何よりの見せ所である。おそらく当時の庶民は、この斬新なイメージに、惹きつけられたのだ。

正純は、江戸初期の幕閣間の厳しい権力闘争に敗れ、改修工事の不審点を糺され、流罪となった。政変の唐突なギャップを埋めるため、庶民の説得用に「釣天井」伝説が捏造され、噂が流布されたのかも知れない。冤罪説がリアリティを持つ。いわば、駿府の家康の側近の本多勢と、江戸の秀忠側近の土井利勝や、家康の娘の亀姫らとの間の血腥い権力闘争であり、それが宇都宮城の謀略で決着がついた——と見ると、構図はわかりやすい。

「釣天井」の話自体は、今日では講談や歌舞伎などで尾ひれをつけられた他愛ない伝説であることがはっきりしている。県立図書館で借りてきたある地方史の本によると、この噂は、実力者を潰すためのプロパガンダ、今日ジャーナリズムでいうところの「人物破壊」の手法だというのだ。

とはいうものの、民間に流布した伝説は、本多正純という徳川の重臣たちの嫉妬の対象となっていた、頭腦明晰で切れ者過ぎる人物の不可解な流罪に対して、民衆の想像力が増幅させた面も多分にある。

体は戊辰戦争の時に焼失したが、その中には「釣天井の石」として信じられ、いわくつきのものとして、覆いを被され、長く隠されていたものもあるらしい。

そもそもこの「宇都宮城釣天井伝説」とは、どのような逸話なのか。かいつまんでいえば、將軍暗殺をめぐる陰謀論だ。江戸時代初期、宇都宮城本丸には、將軍が日光東照宮に参拝する際に泊まった「御成御殿」があった。

三代將軍徳川家光が、東照大権現家康公の七回忌の帰路に、御成御殿に一泊することになった。城主は家康以来の重臣の本多正純。家光の弟の忠長を將軍にしたいと願っていた正純は、寝ている間に天井が落下する「釣天井」を仕掛け、家光暗殺を謀った。その日に向けて、秘かに工事が進む。正純は口封じのため、作業にあたった大工を皆殺しにしたが、その一人の与五郎が、亡霊となって恋人お稲に真相を告げたことから陰謀が発覚した。家光は難を逃れ、正純は出羽に配流された。

——この話には幾つかの変奏があるらしいが、これはかなり脚色の多い、通俗的なバージョンだ。講談や歌舞伎、映画のシナリオであり、実際の史実とは違っている。例えば本多正純は、三代家光ではなくて、二代秀忠の時代に、出羽横手に流されている。たしかに家光の方が、地味な秀忠よりも、芝居としては絵にはなるかも知れない。大

資料を読んでいて、私は何となく、この人物は、自己分裂に悩む現代的な心理を抱え込んだ、目つきの鋭い、傲慢さと潔癖さが同居したような孤独な人物ではないかと思うようになった。

特に、みちのく出羽に配流後、逃亡を防ぐためと称して、四方に柵をめぐらせ、襖や障子まで釘付けされた、昼も陽が射さないような暗い屋敷での十五年もの悲惨な生活は、同情を誘う。

只一人、家康に敬称で呼ばれていたという、正純の前半生が輝かしかつただけに、その悲嘆は、どれほどのものかあるうか。ただ「釣天井」の話それ自体は、他愛もない芝居小屋の座付作者が思いついた、面白おかしいエンターテインメントというところに落ち着くのだろう。

3

御多分に洩れず、地方都市の衰退ぶりはひどいことになっている。メインストリートですら、軒並みシャッターが下りて、陰気な灰色に押し黙っている。

何年も前に廃業してしまったタクシー会社のガレージが、茶色っぽく錆ついたまま、北関東特有の烈風が吹き抜けるたびに、ジャラジャラバラバラと、うるさく鳴っている始末であった。開けっぱなしのがらんとした車庫からは、神社の崖下に面した向こうの側の風景が見え、赤土やベンペ

ン草、セイダカアワダチ草の生えた斜面が、明るくのぞいている。

むしろ活気があるのは、郊外の緑の林を背景として点在する、アウトレットや量販店、ファミリーレストランの連なる広々とした環状線道路であった。

この街で、私は妻の実家の居候同然の身分と相成り、鬱々として楽しまない日々が続いた。妻の親父の伝を辿って、こちらに何とか就職できた。国道四号線沿いの食品会社の商品管理の地味な仕事である。この会社は、スーパーなどに、惣菜のパックや弁当などを仕入れている。以前と業種は違うが、贅沢はいえない。

住居は、昭和四丁目の実家の敷地内に、以前同居していた親類が住んでいたという二階建ての狭い家を、一部改修して安く借りた。南西側には、ほったらかしの竹藪があつて、光の射さない何とも陰気な家であつた。その竹藪は、切つても切つても、新たに小さな竹の芽が生えてきて、薄暗い日陰を作つた。それはまるで、雀のお宿であつた。

しかも食事は、隣接する母屋のリビングで、妻の父母ととることになつていたので、何かと窮屈だ。

この父親がまだかくしゃくとしていて、私のことを情けない娘婿だと思つてゐることを、ちつとも隠さない。無能ゆえに愛娘を不幸にしたと思われている。中学の校長にまなつた根っからの教育者で、若い頃から剣道をやってい

て、いまま近所の子供たちを指導しているせいか、ときどき、大上段に叱りつけるような口調になる。

「志郎くん、君はね、そもそも姿勢が悪いんだよ。そんなことでは、いい運氣も、入つて来ないぞ。しゃきつとしない、しゃきつと」

とはいえ、この父の顔で再就職した私としては、頭が上がりたくない。それこそ私は、この狭くて陽の射さない影のよな家で、本多正純のような不如意を抱え込んでいたのである。——もつとも私は、彼ほどの大物でも有能な策略家でもない。性格が暗くて、優柔不断で卑屈なくせに、人生のある時期、経営者の真似事をやらかし、小さな権力を握つて人を顎で使つて、調子に乗つた報いを受けているという、実につまらない男だ。いまの時代にはどこにでもくすぶつてゐる凡庸な零細企業の倒産経験者に過ぎない。

そのうち、次第に義父ともぎくしゃくしてきた。食事だろうが、車の運転だろうが、私のやることなすこと、いちいち文句をつける。この鬱陶しい実家とは離れた町中に、アパートか安い賃貸マンションが欲しい。あの竹藪の日陰の二階家では、倒産以来の鬱症状がますます本格化してしまふ。

ともかく、狭い書齋でも何でもいいから、あの甲高い頑固者の義父の声の聞こえない部屋を確保したかった。仕事

や調べものを口実に、週に二三日ほど息抜きに泊れる隠れ家があればいい。それで昼休みなど、中心部の城址公園周辺をよくふらつくようになった。できれば、勤務先の工場からも近い場所がいいのである。

というわけで、城址公園から歩いて十分ぐらいの所にある不動産屋を訪ねてみた。

最初の日は、あまりいい物件が見当たらなかつた。ときどき顔を出してくれば、ひよつとしたら拾いものがあるかも知れないという。

社長の立花幸喜という男と、ひよんなことで話が合つて、その後、近くを立ち寄る度に無駄話をするようになった。不動産屋の立花氏は、大柄ででっぷりとしており、どういふわけか顔まで大きく、いかにも人好きのするにこやかな笑顔を絶やさない。鈍い光を放つドンダリまなこをばちばちさせて、早口に喋る。そのむくんだような楽天的な顔には「すべて世はこともなし」とでも書いてありそうである。客商売には向いてゐるタイプだろう。羨ましい。

立花氏は、公園の正式なボランティア要員で、休暇ともなると、日に一度か二度、案内係として立つてゐるという。人がいないときは、よく後ろ手を組んで、下唇を満足げに突き出し、公園内を慈父のような微笑みを浮かべて見渡し

ている。つまりここは、彼のテリトリーなのだ。

ところが、この立花さんが、極端に刑部氏を嫌う。

「あの人には、近づかないでくださいよ、向坂さん。彼が言うことは一から十まで、でためですから。いや、ほとんど妄想に近い。ああいう過つた歴史を、勝手にボランティアのふりをして教えられると、こちらが迷惑するんです」

彼は正式なボランティアとしてプライドを持つており、城址公園の秩序と正しい歴史の啓蒙に責任感があるらしい。この人物とは妙に気が合い、次回、一緒に飲みに行こうということになった。向こうから、わざわざ夕方を指定してきた。

その日、不動産屋を覗いてみると、部屋の物件は相変わらず、これはといったものはない。そこでまたもや、出されたお茶を飲みながら、歴史談義になつてしまった。

私の方も、こんな地域住民の雑談から、ブログの記事ネタを探しているの、ちようど良い。私は悪戯っ気がわいてきて、質問してみた。

「一部に囁かれる噂、つまり釣天井の話は真実であり、むしろあれを伝説だということにしてしまったのは、プロバガンダであり、歴史の情報操作だという説、あれは、どうなんですか」

私は先日図書館から借りた蛭田某という郷土史家だ民俗学者だかわからない人物の本の受け売りをした。私はすぐ受け売りをする。

相手は、上を向いて、ふーっと溜息をついた。

「まったく、違います。そういう伝説は伝説として、軽く受け流して欲しいのです。客観的な史実は、また別な事ですから」

「しかし、世には、正史と稗史はいしというのがありますね」

「稗史ねえ、ただの民間の俗説ですよ」

「それに現代ですら、何が陰謀論で、何が正しい情報なのか、さっぱりわからない。ましてや、江戸初期のことなんか……」

「そんなレベルの問題ではないでしょ！」

ドングリまなこをむいて、語気を強めた。

なにもそこまで真剣になるほどの話題でもなかつた。

私は図に乗って、ヒトの良い素人郷土史家をからかった。

「じつはね、先日、図書館の資料室で、あの石の写真を見たのですよ。戦前まで、二荒山神社の南方、オリオン通りに向かう、いまのバルコの裏あたりまでが低い段丘のようになっていて、その崩れかけた斜面に、一抱えほどの石が山積みしてあった。その一部が、城の釣天井の上に仕掛けられた石だという古い新聞記事ですね」

「知ってますよ、あんな写真。ただの無知な民衆の伝承を記事にしたに過ぎません。そんなゴロタ石は、戦前のこの街には、至る所にありますからね。城の石垣の一部か、近くの裕福な商家の庭石でしょう。どうやって特定するんですか、ただの石ころを。当時の新聞記者だって、ネタが

ないので、面白おかしく記事を書いただけですよ」

立花氏は下唇を突き出して、そっぽを向き、渋い顔を続けた。

「噂には証拠も記録もない。歴史では、事実、ファクトというものを重視しなけりゃ。そんな話は、いまでいう都市伝説です。その種の根も葉もない話を、あのオサカベという男は、平気で散歩者や観光客に吹き込むんです。あのねああいうのは病気なんです。淫するという言葉やつ。本多正純という人物を漁っていて、いつのまにか感情移入して、一体化してしまふ。敗者の美に、酔ってしまふ。判官びいきの一種ですよ。……真実は自分だけが知っている、世界のすべてが正純の敵だったと思ひこむ。そこにはまさしく不如意で惨めな自分の姿が、投影されているに過ぎません。在野の独学者がよく陥る典型的な病です」

私は立花氏の顔を改めて見た。何とかやり込めてやりた

い。「不如意で惨めな自分の姿。なるほど。あのヒトは、本多正純に感情移入していたのですか。……しかし、正純を正当化するなら、むしろ、釣天井説は否定するはずではないですかね」

「わかるじゃないですか、その心理。単に、一般で信じられている通説や、正しい歴史を覆したいだけ。悪役にされている正純が、凄惨奴だったといたいだけなんです。とときどきこの町で見られる病気です。石狂い、物狂いの石とかいうのですよ」

「物狂いの石。そりゃあまた、呪術的な……」

「いつてみれば、石に憑りつかれるんです」

それから、掘り出し物の物件を語る不動産屋の口調で、

「あのですね、実は」と声をひそめた。

「あの爺さん、十五年以上前に奥さんが亡くなってから、ここがおかしくなった。まあ、あんな変人に、もったないくらいいの女だったか」

自分のこめかみを指差しながら、くるりと回し、意味ありげに私を睨んだ。「まさしく、美女と野獣というやつでね」

「私も、タランチュラ男爵とひそかに呼んでいるんですよ」

「フン、言えますな。あのハンチングの下で陰険に光る黄色い目は、獲物を狙う毒蜘蛛そのものですな。とにかく、賛同者が欲しい。支持者が欲しい。考えてみれば可哀想な人間なんです。……それはそうと、もういい時間だ。どうです、私の知っている店があるんで、カクテルでもつきあいませんか」

この地方都市では、ずっと昔に、カクテル・コンクールで優勝した名バーテンダーがいて、その長老の弟子たちがいつの間にか育ち、のれん分けをしてあちこちに店を出しているという。立花氏も、飲み屋街の泉町に行きつけのバーがあるらしい。

にかくもう、何でもかんでも、通説定説を引っ繰り返したという、ひねくれた衝動に過ぎませんよ」

それなりに立花氏の指摘に納得した。

「となると、史実うんぬんの問題ではないわけだ。道理で、人間の心が見えてくるとかなんとか、わけのわからんことをいっていたわけだな、刑部さん」

「読んでいるんだ、だいたいアイツが何を考えているのか。以前、うちのバイトの女の子を向けさせて、胸の隙間に差し込んだICレコーダーに隠し録りさせたんです」

彼はニヤリと笑い、指で自分の胸元をつついた。
「内容といったら、それはもう……ひどいもんだ。もうちょっと、まともな歴史を勉強して欲しいですよ、私は。善意の第三者としてね」

「しかし、善意の第三者が、盗聴しますかね」

相手は鼻白んだ。少し溜飲が下がった。

「盗聴と、隠し録りは違う。それに、犯罪予防のための録音です。実はね、城の天井に並べてあった、かなり大きな石の一つを所有しているというのが、刑部氏の隠し玉なんです」

立花氏は、嘲るようににんまりと目を細め、両手の親指を突き合わせ、しばらく腹の前で弄んだ。

「やはり、残っているのですか」

「下らない民間伝説ですがね。あれが、よくないんだな。

私もまだこの時間、あの陰気な竹藪の家、あの堅苦しい義父の支配下にあるような雀のお宿には、帰りたくはなかった。早めに帰っても、義父にまた何かつまらないことをいわれるだろう。

我々はそのまま話し込みながら、夕暮れの川沿いの道を十分ほど歩いた。

途中、意外にも立花氏は鉄道オタクであり、カメラ片手に列車の写真を写し、データとして溜めている写真のコレクションも、相当数になることがわかった。

「いつか、私もブログを始めて、自慢の写真をアップしようと思ってるんです」

大通りを超えると、町中を流れている釜川が、藍色の水をちよろちよろと水銀灯に光らせていた。

遊歩道を歩き、泉町の細い道を少し入った雑居ビル二階の店であった。すでに七時を過ぎていた。

光沢のある厚い木製扉を、立花氏はほんの少し開いた。そして振り向きざま、嬉しそうにニヤリと笑い、指でOKの形を作った。

「ここはね、常連で混んでいて、ときどき入れないときがあるんですよ」

ついで、にこやかに笑みを浮かべ、グラスにカクテルを注いだ。その仕事はいかにもプロフェッショナルである。

何というカクテルなのか、柔らかな董色の液体は、テーブル席の女性客に、手渡された。

「オリジナルとか、ありますか？ それください」

私は厚かましく、そう注文した。

「じゃあ、僕も同じのを。……さてと、刑部さんの話なんですが」

立花氏は、深刻な表情をした。またか、と私は思った。

「あの人の奥さんは、実に可哀想な人なんです。なかなかの美人だったのですが、もともと軽い小児麻痺で足が悪かった。たまたま小中学校が一緒でしたね、憧れたんですけども。もともと、僕はずっと年下だったですがね。障害を持っているのをいじめられる一方、男の子たちの憧憬の対象でもあったんです。……結婚してからも、よく片脚を引きずるようにして、買い物籠を下げ、舗道脇で呼吸を整え、休み休み歩いている姿が見られましたよ」

何だか狭い世界の話になってきた。

しかし立花氏の口調は、この辺からかすれたように変化した。

「奈緒さんが育ったのは、裁判所の南側の材木町という界限なんだが、怖ろしいことに、そこには刑部工務店があった、その袋小路の奥のどんづまりに、奈緒さんの家があっ

店の窓から黒いチョッキを着た女性店員が、カウンターで動いているのが見えた。

入ってみると、昔ながらの風情のバーらしく、店内にはぎつしりと琥珀色や青や緑の洋酒の瓶が、きらびやかに並んでいる。洋酒棚の周辺には、水晶やアメジストなどの鉱物のオブジェが飾られていて、照明の光を華やかに反射していた。

女性をまじえた二グループほどテーブル席に座り、白髪頭の常連客らしい老人が、カウンターにいた。立花氏は軽く会釈をした。

二十代後半ぐらいのポニーテイルの女性が、タオルとメニューを渡してくれた。黒い短めのチョッキに、白いシャツという古典的なバーテンのスタイルで、女性でも、なかなか様になっていた。ちよつと気の強そうなりすのような目をした美人で、こちらを見てにっこりと挨拶した。

「ね、月子ちゃん。いいでしょう。本当は月岡瑛子さんというのだけど、常連からは月子ちゃんといわれている。夜空を照らすお月さんみたいだからね」

立花氏は、齒の浮くような台詞をいった。

女バーテンダーは、横を向いて澄ました顔になると、いきなり、きゃしゃな両手で素早く上下にシェイクを始めた。それはいかにも、女剣士といった凛々しさで、なるほどこれならファンがつきそうだ。

た。つまり、工務店の裏の借家だったわけです。刑部工務店も、先代は住宅ブームもあって、かなり儲かっていた。親同士は、家主と店子の関係。貧乏で家賃も滞納がちだったらしい。しかも奥のアパートには風呂がなかったの、刑部家の裏手にある風呂を、親子で借りに来ていた。刑部は子供の頃から、潤んだような目をした美少女の奈緒さんに、目をつけていた。そして夜毎、風呂場をこっそりと、覗き込んでいたに違いないのです」

立花氏は、次第に声をひそめた。

「そのように、本人から聞いたのですか」

「いえ、それくらいは想像できるじゃないですか。親はうすうす感づいてはいても、家賃の引け目もあって、娘に何をされても黙っていた。そしてオサカベは、お前みたいな体の悪い女は、誰も嫁に貰ってくれない。絶対に幸福にはなれない。どうするんだ。だからこの俺がもらってやる——そんなふうには、十二三の頃から、毎日のように言い聞かせていて、いつのまにか優しい兄のように思わせる手口を習得した。つまりは、悪質な洗脳であり、いわば飼育というヤツです。周囲の世界から孤立した狭い袋小路の奥で、ほとんど隣り合わせに住んでいたことが、奈緒さんの不幸の始まりです。小学校は一緒に通ったらしい。そこでいったい、何が起ったか」

立花氏の目が異様に輝き始め、ごくりと唾を飲み込んだ。

私は、妙な不健全さを感じた。

「ほとんど子供の頃から、あいつの餌食になった。そもそも奈緒さんは、脚さえ悪くなければ、あんな化物に言い寄られる人じゃない。色白の瓜実顔で、若い頃などきれいな服着て椅子に座っていれば、どこぞの令嬢で通りましたよ。それをあの厭らしい変人に、早くから調教されたようなものです。工務店の奥の狭い路地の行き止まりの暗がり、刑部のおぞましい所業が始まったのです」

相手は唇を噛みしめた。

「つまり、美しい蝶が、早くから蜘蛛の餌食になった

……」

「うまいことをいうなア、向坂さん」

つまらない喩えが、妙に感心された。しかし立花氏には、そこで目撃した光景がよほどショックだったらしい。あえて詳しく聞かなかつたが、せいぜい子供同士の悪戯だろう。むしろ、彼がしている行為の方が、覗きではないのか。

「ほんとうに蜘蛛が、チョウチョウに食らいつくように、なのですよ」

一点を見つめ、自分だけの世界に入ってしまった。

「あのね、こういうヒトなんですよ」

彼はカウンターの手前で屈み込み、隣の客に隠れるように、古ぼけたモノクロ写真を見せてくれた。

「これが奈緒さんです」

狭い路地裏の窓辺に、身を乗り出すように覗き込んで興奮している頭のかいニキビ面の立花少年……。

——それにしても、何でまた三、四十年前も前のローカルな少年少女の三角関係に、見ず知らずの私が立ち会わなければならぬのだろう。

「なるほどね。あのタランチュラ爺さんに、そんなロマンスがあったんですか」

「ロマンス、めっそももない。分不相応な男が、あんな女性を手に入れたのです。ほとんど犯罪に近い。もともとそういう男なのです、刑部は。僕はね、中学生の頃から、奴の悪行を知っているのです」

立花氏の下唇は、異様に赤い色を増していた。しかも、お通しで出てきたオカラを唇の端に白くつけたまま饒舌に喋っているのです、ますますこの大顔が馬鹿らしく見えた。

「奈緒さんはねえ、あの、中学の卒業式のときに集合写真の撮影日に出られなくて、休んだ。あとでアルバムの左肩のところ、小さく顔写真だけが入っていた。これが、何を意味しているかわかりますか」

「いや」

「彼女、この時、妊娠してたのです」

私は、なるほどとうなずいた。

ミネラルウォーターの栓を抜いていた月子さんが、一瞬だけ、こちらを向いた。

確かにそこには、涼しげな目をした清楚で可憐な美少女が写っていた。少し照れたような顔をして、やや前屈みにポーズを作り、後ろ手を組んで柵の前にたたずんでいる。白いノースリーブ姿で、華奢な色白の肩を出し、西洋風の雰囲気すら感じられる少女だった。眼と眉の陰翳、長い髪が分けられたまるいおでこ。「夏の軽井沢にて」などというキャプションがついていても、違和感はないだろう。何とかいう昭和の女優にも似ている。

なるほどこれでは、立花少年がぼーっとなっても仕方がないかも知れない。

「しかしなんでそんな写真を、いま、持ち歩いてるんですか」

「いや、僕だって、いつも携帯しているわけじゃないですよ。今日はあなたに会うというから、特別にわざわざ古いアルバムをひっくり返して持って来たんじゃないですか。いかにあの毒蜘蛛野郎が悪い奴かという証拠として……。それにこの写真は、奈緒さんに、何度も懇願して、撮らせて貰ったんですから。元を取らないとさ」

何だか考え方が、えらくずれている。完全にいまでいうところのストーカーではないか。

せつかくカクテルを飲みに来たのに、醜い顔をした出っ歯の十代の刑部少年が、あられもない姿の奈緒さんをいたづらしている光景が、おのずと浮かんできてしまう。その

「そして、あの忌まわしい高校生の刑部の子供を、墮したんです。僕まで脅されて、二千元もカンパさせられた」

そこで義憤にでもかられているように、どنگり眼をむいた。

「大人になってからも、奈緒さんは自分を卑下して、いつもうつむいて、かすれたような声で話し、人前でもおどおどしていた。気位やプライドというものを持つことができなかった。そういうふうには、アイツが仕組んで洗脳したのです。世界中がお前一人をあざ笑っているという奇怪な幻を、何も知らない少女に吹き込んだ。人工的に劣等感を捏造し、それを丹念に移植した。歴史でも、私生活でも、オサカベがやっていることは同じなんだ。……己の暗い世界観で、相手をいいように金縛りにした。つまり、自分のこっそり吐く蜘蛛の糸で、相手をがんじがらめにしようとする。あの男は、そういう知恵だけは、発達しているんです。策略、奸計、からくり、そんなものが大好物なんです。……奈緒さんは、大学に入学する僕と一緒に、東京にでも逃げればよかったんだ」

「はあ。駆け落ちですか。そんなに好きなら、喧嘩でも何でも仕掛けて、刑部をやっつければ、良かったじゃありませんか」

私は半分、面倒くさくなってきた。

「それができればねえ。ところがあなた、僕は根っからの

平和主義者なんです。その当時は、あの二人を追って写真を撮ることしかできなかったのですよ」

「写真を、ですか」

「白状すると、僕はあの二人の、写真師だったのです」

心なしか立花氏の声は、涙ぐんですらいいた。よくもまあ、思春期の恋敵を、恐ろしくも長い間恨み続けて生きてきたものだ。このマゾっ気のある奇怪なる純情男は、刑部氏とはまた別の種類の変人らしい。

カクテルバーに来る途中で、彼は鉄道マニアといつていたが、列車の写真とともに、この男は、中高生の頃から、奈緒さんほか、膨大な他人のプライベートの盗撮写真でもコレクションしているのではないか。いわゆるオタクの走りというやつだ。聞いてみると立花氏には、娘が二人いるという。携帯に入っている家族写真も見せられた。一応は健全な市民生活を営んでいるらしいのである。地方都市で静かに暮らしている平凡な人々の微かな妄執の匂いを感じた。

「はい、どうぞ。ムーンライト・シャドウ」

「ありがとう。きれいなカクテルですね」

私は、月子さんの笑顔を見て、ようやくほっとした。

グラスの位置はちょうど、上からスポットライトを浴びているようだった。

「以前、お客さんに、月をお題にしたカクテルを作れって、

工務店を経営し、自分でも現場作業に加わっていたという。彼はもともと、手先の器用な職人なのだが、我儘で疑念の強い性格で、人望というものがまるでなかった。九十年代に入って早々、バブルが破綻した。給料の遅配が続き、金の切れ目が縁の切れ目、ということになり、三四人いた社員に逃げられ、店がうまくいかなかった。店舗をリサイクルショップに改造し、奥の空間を奇妙な喫茶店にして、何年間かは自転車操業を続けた。

そうこうするうち、心労が祟って体の疲れも出たのか、奈緒夫人の体調もおかしくなった。店に立っていても前屈みになり、苦しそうに顔をしかめる。それでも彼女は黙っていたのだという。

そんなある日、病院の検診で、子宮癌だか乳癌だかが発覚したそうである。立花氏によれば、つねに唯我独尊的な振る舞いをしていた刑部氏による長年のストレスが、奥さんの体に出たという。

「あのタランチュラはね、偉そうにしていますが、いざとなると自分では身の回りの事は何もできないんです」

彼も私と話すようになってから、「オサカベ男爵」「タランチュラ」「毒蜘蛛野郎」を好んで使うようになった。ときどき、揶揄的に語るときは「バロン・オサカベ」ともいった。

愛妻の病により、さすがに刑部氏も改心したのか、彼は打って変わって、かがいしく看病した。しかし奈緒夫人

嘸し立てられちゃって。わたしの好きなマイク・オールドフィールドの曲にインスパイアされて作ったんです。いまかかっている曲が、その曲ですけど」

薄いほんやりとした黄色い液体が目の前に二つ並んだ。立花氏も、にんまりと笑みを浮かべた。

カクテルグラスは照明の光を透かして美しい。流れている曲も、いかにも青白い月の光が降り注ぐ神秘的な夜のイメージだ。

立花氏の生臭い話に辟易していたので、ウオッカカベらしいこのカクテルを一口飲んで、その爽やかな酸味と洗練された甘さを、絶賛した。

4

私はその日、竹藪の家に帰宅してから、立花氏の話をつか反芻してみた。何かブログの記事にできるかも知れない。帰宅時点で、すでに十一時近くになっていた。母屋の方を見ると、応接間の窓辺に、丹前を着て背すじを伸ばして立っている長身の義父の影が、ほんやりとオレンジ色の明かりに透けて見えた。

——立花氏の話は、刑部氏への憎悪だか嫉妬だか、よくわからない感情に染められており、客観的な印象とばかりは言いきれないものがある。

刑部憲造氏は、中年期の後半までは材木町の方で小さな

は医師の予告通り、正確に三か月後に亡くなった。

「そのときオサカベはこういったもんです。あの医者、自分の予見の通り、びつたりと妻を殺すために、こっそりと癌の増殖を早める毒を盛ったと。あちこちに、そう言いふらしたのです。馬鹿馬鹿しい。……野上医院はあの立派なビルの四階まで、いたるところ、人を殺す機械と毒薬がいっぱいだとね。名誉毀損もいいとこですよ。いったんそう考え出すと、奴の病的な陰謀アタマは止まらなくなる。暗い暴走を始めるんです。考えてみれば、あの時点からおかしくなっていたのですね。それからが、あいつのゆがんだ偏執狂人生の始まりです。常に世界と自分とが敵対している。壁から天井から、路上から、自分をのしる声が聞こえる。これはもう、病気です」

しかし、刑部氏のエキセントリックなところは、私生活における唯我独尊ぶりだけではなかったらしい。

平成の始まった頃から、地元では、宇都宮城再建の話が盛り上がり、いろいろな動きが具体化していったようである。行政側としては、それも町起こしの一環らしいが、もともとが天守閣のない平城の館であるため、城らしい情景といえ、白い漆喰壁でできた清明台と富士見櫓という二つの櫓、本丸周囲の土塁、ぐるりと巡るお堀の再現などが、かろうじて城郭風景を形成することになる。

そのプロジェクトの最中、あの刑部氏が何の予告もなし

に、唐突に事務所に現れて、「釣天井」は再現するのかわかると、激しくまくし立てたというのである。

事務局の方では、そんなことはまったく考えていないという、いきなり声を荒げて激昂したそうである。

——この伝説は、江戸時代から講談や歌舞伎、あるいは映画として伝わっている。真偽の詮索はともかく、それ自体が貴重な民衆文化なのであるから、せめて資料館の一面に、風俗史としての「再現からくりコーナー」を作るべきだと、刑部氏は主張したらしい。

幸いそのときのボランティアのスタッフに、市内の大学のラグビー部や柔道部の屈強な連中がいて、何とか力づくで追い出してくれた。それでも刑部氏は、翌日からしつこい電話攻勢を数日間続けたという。

立花氏らのグループも、うんざりしつつも静観の構えで無視していた。

ところが広報活動として市内の公共施設で展開しているタウンミーティングの際に、またしても、あのタランチュラ男爵が出現したのだそうである。

「暗いオーラを放っているの、一般人の中に紛れていても、すぐわかるんです」と立花氏はいった。「ほら、あの乱杭菌。黒メガネを外しても、何とこのか、深海魚みたいな顔してますからね」

その時も、突然勢いよく手を挙げて、会場の真ん中で立

……しかも、朝も夜もない非常識なヤツだ。委員の子供らは、なまはげでも見たように恐がるし、スタッフの奥さんたちも、ノイローゼ状態。事務所に怒鳴り込んできたときは、顔を見た途端、若い連中が危険人物として、羽交い締めにしてしまう。ところが、意外に腕力が強い。やはり柔道部、ラグビー部クラスでないかね。その時いた連中は、さっぱり役に立たない落研と映研でした。警察を呼ぶといつても、あまり大騒ぎにはしたくはない。奴さんに、市政と特定業者との癒着などといわれ、それがまっとうな告発だと市民に誤解されても、それはそれで問題ですからね」

要するに、立花さんによれば、刑部氏を動かしているのは、自分自身でも気づいていない世間に対するルサンチマン、すなわち怨念だということだ。

「人間はね、自分が不如意で正當に扱われていないと思うと、歴史だの国だのを、大きなものを、口ぎたなく罵りはじめるんです」

私はなんだか、他人事ではないような気がした。実は自分もブログで似たようなことをやって、陰気に溜飲を下げているのだ。

「すべて問題はね、自分の人生なのです。偉人や英雄など、人様の作った歴史ではなくてね。あの不幸な男を見ていて、そう思うんです。……おそらく、自分は古い資料や文献のみならず、正確な釣天井の設計図すら持っており、

ち上がり、雛壇に並んだ実行委員の面々を睨み据え、大声で支離滅裂な質問を始めたらしい。容貌魁偉な刑部氏は、ときどき、例の赤茶けたステッキを床にコツコツと突いて、委員一同を威嚇していたという。そこには市会議員もまじっている。

質問は勿論、「このプロジェクトで釣天井は再現されるのか」である。

「あの変人は、刑部家の爺さんの代から伝えられたと称する、偽の古文書と、後で神田で入手したというボロボロの染みだらけの黄色い設計図を振りかざし、すぐに自説の展開を始めやがったのです」

そのタウンミーティングには、市民が数十人集まっていたそうだが、その場の混乱は想像に難くない。

「むろん、史実通りに再現しようとする実行委員会は、そんな根拠のない伝説など、相手にしやしませんよ。大学の先生方の研究に基づき、実証的、学問的に行くんです。そもそも天守閣のない城のどこに天井を釣る空間があるんですか。……ところが奴さん、完全に無視されたと思って、ミーティングのあとでも、実行委員のそれぞれのメンバーの自宅に、連日のように怒鳴り込みに来た。あの野郎は、元工務店の店主として、勝手に釣天井関連の仕事が発生すると思っ込んで、その期待を裏切られたので、独りでキレているだけなのですよ。」

なおかつ、そのレプリカまで作っているのに、プロジェクトの実行委員に加えられていないというのが、不満なので「レプリカまでねえ」

「そうなんです。のめり込むですよ、あのヒト。そんなのはねえ、独学者にありがちな僻み根性です。独学？いや違う。彼は学者や研究者なんかじゃありませんから。ただ、もう、工務店関連の何かオイシイおこぼれ仕事をハイエナのように狙っていた。あのおっさんの夢見ていた釣天井コーナーの監修者、アドバイザーかなんかに加えられると、本気で思っていた。その欲のからまった醜い期待が、ありもしない妄想までふくらませたんですよ」

そのうち刑部氏は、こともあろうに、本多の殿様の下で実際に釣天井の工事に関係した棟梁の末裔などと吹聴し始めたという。もともと偏屈親父だったが、本格的におかしくなったのは、リサイクルショップも左前になった後、奈緒夫人が亡くなってからだという。奇妙な逸話は、この時期の妄執や異常にゆがんだ行動を言っているようである。

その後も、壁や電信柱に、再現プロジェクトを非難する手書きの壁新聞や、チラシのコピーなどを作成し、電柱に貼りまくったり、家々にポストイングしたり、攻撃的な行動を取り始めた。奇怪なクレーマーに変貌したというのである。

「あげくの果てには、われわれを悪者にして、市民の金を無駄遣いしているとか、市長も行政も実行委員も裁判所も、すべては特定土建業者と結びついてグルだったんだとか、もはや民主主義の崩壊だとか、あらぬことを言いふらす。思いあまつて、実行委員グループが決死隊を組んで、刑部氏の自宅に抗議に押しかけた。奈緒夫人が亡くなったあと、荒れまくったままになっている喫茶店跡をね」

ところがそれが逆目に出て、刑部氏は秘密の古文書を押取に来たと思ひ込んだらしい。路地の奥で、熊のように吼えまくり、さすがの「決死隊」もうんざりして退散した。

「すると奴さん、二日後にはもう、町内会の掲示板や、公衆電話のボックスに『我、勝利す!』という濃い墨文字のチラシを、ベタベタと貼り付けた。はつきり言つて狂人ですわ。ありやね、何ていうのか、もう、モンスター・クレマーです。もう、ほとほと疲れましたよ、あの騒動には……」

5

薄曇りのある週末、それほど暑くはなさそうなので、私はひさしぶりに散歩に出かけることにした。

県庁の北に八幡山公園という小高い山があり、市民の憩いの場となっている。頂上には東京タワーを模したような小さな赤い電波塔があり、エレベーターで展望フロアまで上がつていくと、霞んだような大気を透かして、灰白色の市街地が

見渡せた。

起伏のある山の中腹には、ツツジと芝生が植えられているが、春ともなると霞のような桜に蔽われ、ほんぼりが垂らされ、花見の名所となっていた。

この辺は、妻の実家からもさほど離れていない。あまり人の来ない一画に、良い色合いをした大きな楠木が生えている。その木蔭になった所があり、気候のいい日には、雑誌や文庫本を片手に芝生の斜面に寝そべることができた。

私は週末ともなると、そこに腰を下ろし、しばらくぼんやりとしたあと、丘の上にある昔ふうの茶店まで登って行って、枝豆をつまみながらビールを一瓶開けて秘かに悦に入り、その日の単調な散歩を終える習いがあった。

——その散歩の途中、とつぜん刑部氏から携帯に連絡があった。明日あたり、久しぶりに会いたいというのだ。一瞬、まずい唾を飲み込んだ。どうも私は、妙な人物に好かれる傾向があるようだ。

話を聞いてみると、例の因縁のある自宅に招待したいらしいのである。世間一般に相手にされない彼は、一人でもいいから信者が欲しいらしい。

私は、躊躇したが、ここまで来ると、逆に、多少の好奇心も、ないわけではなかった。

私の中では次第に、みちのくに配流され、釘打ちの板でが二本ほど幹を並べ、がっしりとした石蔵のような建物があった。ここが立花氏が少年時代に覗いたという、いわゆるつきの場所らしい。

奥正面の貧弱な二階建てのアパートが、奈緒さん一家が住んでいた家だろう。カーテンは閉じているが、干しっぱなしの洗濯物が見える。現在、誰か住んでいるのかどうかわからない。手前には、もう何年も使われていない錆びた自転車を立てかけてあった。この路地の一角が、刑部少年の縄張りだったのだろう。

案内されるままに、刑部邸の扉を開けたとき、何ともいえないような、微くさい空気が、つうんと鼻をついた。

座敷牢——そんな言葉も連想した。

隅の方がぼんやりと白く見えるのは、いたるところに蜘蛛の巣が張られているせいだ。蜘蛛男爵、タランチュラという仇名が、冗談ではなくなってきた。

埃っぽい、見捨てられたような投げやりな感情が、蔵の内部には籠もっていた。壁に石が使われているせいか、室内は意外にもひんやりとしていた。

「ここはねえ、祖父が東京の古書街で入手した設計図を、私の代になって再現したのですよ。御成御殿の一部で、縮尺は三分の一ですがね。ここから手前までは一時、喫茶店にしていたのです。まったく流行らない喫茶店でしたが」

閉まれた屋敷に幽閉されていた本多正純の晩年の孤独と、乾いた風の吹きすさぶ城址公園に立ちつくす刑部憲造氏の孤独とが、重なって見えた。

その日はどんよりとした天気、少し蒸し蒸ししていた。刑部邸のある場所は、材木町という繁華街とはいえない一画の中の寂れた通りであった。かつてはこの辺ももう少し、家並みが密であったらしい。樹木に蔽われた古い寺や、低い石垣に叢が寝そべるようにびこった空地が広がる。

いかにも流行っているような薬屋の旗が、ゆるいくたびれた風におおられ、客のいないヘアーサロンが、白つちやけた風景の中で、鈍い日射しを浴びていた。

彼はすでに表通りに出て、腕組みをして私を待っていた。あの体型なので、遠くからでもすぐに確認できた。

話相手のいない孤独な彼は、長い間、そこに立っていたのだと思う。私が挨拶すると、彼は珍しく少し照れたように、後頭部を撫でた。

道路に面して、すでに閉店になった「リサイクルショップ・オサカベ」があった。

看板だけがわびしく通りに向けられており、灰色の窓は二枚ほどびび割れ、紙テープで押えられていた。ガラスの後ろには、寝ぼけたような色合いの古いカーテンが透けている。

その裏手の袋小路になっている右側に、埃っぽい棕櫚の樹

刑部氏は、血色の悪い厚いゴムめいた唇につつまれた銀歯まじりの口を開いて、そういった。

内部に入り天井を見ると、なるほど格子状の木の枠が見えた。

「吊り天井の技術そのものは、平安時代からあったのですがね。後に、寺院建築や、茶室、数寄屋作りで広まった。格天井ともいわれて、天井板を吊り下げるかたちになっており、室内からは、無粋な建物の骨格が見えなくなるわけです」

私は立花氏の話に聞いていたレプリカというのは、あくまで、紙や木で細工された小型の建築模型だと思っていたので、いささか戸惑ってしまった。

暗い壁の上部に明るい窓があり、そこから黄色い光が差し込んでいた。舞い上がる細かな埃を太陽光線が斜めに透かす。その明るい帯の中を、ゆらゆらとくねりながら銀の粒子が上昇する。私は、二三度むせた。

「入場料無料、コーヒー一杯四百円。私がコーヒーを沸かして、家内がちょっとしたサンドイッチやピラフを作ったのです。あいつのファンと称する学生が、何人かよく来ましたがね。多分、あのニキビ面の連中、ロクなこと考えてなかったでしょう」

よく地方の神社の境内に、長いこと使われずにいた古い田舎歌舞伎の舞台が、廃屋同然に放ったらかしになっていた

「あの格子を、四方の太い鎖が支えている。そして斜めに張られた縄が、それぞれの力の均衡を調整している——」

闇の中には何か無数の黒っぽい紐のようなものが垂れ下がっていたが、目の焦点が合うにつれ、それらが錆びついた鎖や、縄紐の類であることが明瞭になった。その紐の根元のあたりに、白い蜘蛛の巣が張っていた。

「何年も前に、雨漏りで天井板が腐って剥がれ落ちてしまった。知り合いの看板屋に、見事な雲龍の絵を描かせていたのだが」

格天井の無残な骨格部分だけが残ったというわけだ。なぜか私には垂直にたれた鎖の列が、黒くしなだれたウミヘビの干物のように思われた。

このじゃらじゃらと乱れた鎖の群れは、あるものは長く、あるものは短く、難破船にかかった海藻のように、暗鬱にだらりと下がっている。そこには荒廃の極みにある奇怪な美すら感じられる。建物全体に幽霊船のような凄惨さが漂っている。

「ずいぶん変わった喫茶店ですね。お店をやっているとき、天井に石は積んであったのですか」

私は熱いコーヒーを啜りながら、尋ねた。

「もちろんですよ。その手動のハンドルト、梔子のような機械があるでしょう。正純が残した図面通りの設計です。大きな歯車と発条のある。それで上げ下げして、客に見せ

たりすることがある。この薄暗い蔵のような家も、全体にそんな時代に忘れられたような風情があった。

私が室内を眺めていると、店主は階段下に回って音楽をかけた。私も知っているセザール・フランクのヴァイオリン・ソナタだった。物憂くも仄暗い旋律が響いてきた。悲哀、惧れ、失意、怒り、不安、憧れ。そんな感情が床を這い、壁をつたい、先鋭な弦の響きが、乱れたようなピアノの音を交えて宙を掻きむしる。

まもなく、コーヒーが出て来た。

「カップはね、蘆田秋生という益子焼の作家のものです。きつとこの人の作は、あとで値がつくと思うんだがね」

意外にも、それは旨いコーヒーだった。使っている豆は、わざわざ業者を選ばせたハワイコナだという。

この異相のカリガリ博士とも、タランチュラ男爵ともつかない老人が、妙な味のある場末の喫茶店のマスターふうにも見えてくるので、不思議なものだ。

彼は室内でもハンチングを被っていた。おそらく禿頭のだろう。後頭部からは、荒いばさばさの銀髪がはみ出し

ている。

「上を見てごらんさい」

彼はステッキを斜めに上げた。言われるまでもなく、私はハンケチを口元にあてつつ、ひとつ奥の方の天井の暗がり

たのです。それと……。ほら、あその畳の上に、將軍の寢床を作って、秀忠の人形が横たえてあったのですよ。わざわざ金をかけて、東京の人形師に作ってもらったものです。本能寺の信長のような寝間着姿で、この辺には御簾を垂らしてね。まるで、生きて寝息を立てているようなやつでしたな。行灯や文机、枕をそえて。映画のようにぼんやりと御簾の向こうから、ライトアップもしてみせた」

「それはなかなか、凝っている」

「ところが秀忠さん、ある日、移動したときのちよつとした弾みで、ボコリと首がとれて壊れてしまった。いまは向こうのリサイクルショップの床に寝かせてあります。ブルーシートをひっ被せてね。てっきりあの時は、正純が、仇討をしに来て、首を獲ったのかと思った……」

「まるで、お知り合いの方のようですね」

しかし私の皮肉は、通じなかった。

「いや、暗殺の場所は、湯殿説もあるのですが、その説は、私は採用しません。風呂よりも寝所のほうが長時間いるわけだね、暗殺には失敗がないはずだ。……このアイディア、名所になると思ったのがねえ、こんな酔狂なことは誰もやっていないから。しかし、無理解な一般大衆には、まるで相手にされなかった」

狭い高窓から、薄日が射し込んでいた。

「無理解な一般大衆、ですか」

私はいい気なものだと思いつつ、そっぽを向いて、熱いコーヒーを啜った。そして、閉店されたりサイクルシヨツプの隅に横たわってブルーシートを被せられているという二代將軍・徳川秀忠の首のとれた人形を、ぼんやりと思い描いた。その將軍人形を見ているかといわれたが、私は遠慮しておいた。

「事故が起こる可能性とかは、考えなかったのですか」
「こちらのテーブル席には、石は落下しません」

彼は断言した。

私は溜息をついて、幽霊船のような室内を見た。

この光景は何も語っていない。歴史など語っていない。ただ、刑部氏の心の荒廃を語っているに過ぎないのだ。

「どうせ、客が来ないのはわかりきった話だ。道楽だと陰口をきかれていますのわかってはいます。その頃は親父が売った真岡の土地の金が、まだありましたからね。パブルの頃、あるバカな大企業が工場用地として、買いつけてくれたのです」

ある意味ではいい御身分なのである。しかしこの男には、世間への感謝の気持ちというものが、まったくなくない。

脇の木の段を上まで登ると、天井裏の構造が見えるという。主人に促されるままに、私は急な梯子段を、恐るおそる登って行った。

数段ほど登ると、全景が見渡せた。太い木の格子の上に

お前にはできない、と侮られているようで、私は癩にさわった。「なるほど、それも面白い」という顔をして、靴をぬぎ、段差のある畳の間に入った。

私はそこで深呼吸をして腰を下ろし、古畳の上で、ゆっくりと仰向けになった。そしてそのまま、両手両脚をきちんと揃えて、上を見あげた。

そこから真上には、怖ろしい光景が迫っていた。

格子状の木枠の奥に、大小ふぞろいの灰色の岩らしきものが、暗くひしめきあっている。つい目と鼻の先に、鬼の顔面のような岩々が、真下を睨みつけて並んでいる。目を睜（はら）ついていると、魅入られたように、遠近感が狂ってしまう。「ちよつとだけ、天井をソロソロと下してみましようか。ここで暗殺される將軍の気持ち、味わってみるのもいい」

「え？」

奇妙な館の主人は、暗い薄笑いを浮かべ、井戸の釣瓶でも操作するように、両手を動かした。

「——アンタ、自分のこと、好きかね」

「どうして、そんなことを」

私は顔をあげた。

「これまで、生きたいように……生きて来られたかね」

主の声には、冷酷な響きがあった。

「あの、言っている意味が……」

「ときどき自分を、ブチ殺してやりたくなるようなことが、

ごつごつと岩が並び、何とも禍々しい光景であった。

二階の釣天井のさらに上の方に、神棚が見えた。

暗がりのところを覗いて見ると、屋根裏の暗がりに小さな社とお神酒や榊が見えている。

お札のような紙の途中に「奈緒」と書かれてあった。亡くなった夫人の名前である。目を凝らして見ると、「刑部大明神奈緒姫之命」と読み取れる。榊はすでにちりぢりに干乾びていた。死んだ自分の妻を、神様扱いしているのか。この男にかすかに不吉な病の匂いを感じた。

昔、信州に行ったとき、松本城に立ち寄ったことがある。天守閣への急勾配の階段を登った最上部の暗がりに神棚が祀ってあった。城を護る女神である。そういえば泉鏡花の『天守物語』も、姫路城天守閣に棲みつく怪異の話であった。刑部大明神奈緒姫之命——というのも、何やらこのからくり館に棲みつく、美しいもののけの気配を思わせた。

梯子段下の壁の脇に積んであるのは、天井板の廃材らしい。薄緑色の雲龍の爪や鱗らしきものが見えるが、うつつらと埃をかぶっていて、はっきりと確認できない。

「どうです。せつかくですから、アンタも將軍様の寢床に寝てみませんか。下から仰ぐと、釣天井の構造がもつとよくなる」

刑部氏は、異様に目をぎらぎらさせて、こちらを見た。

なかったかって、ことさ」

「そんなことを、何も、あなたに」

「それでは、運だめに、降ろしてみるか」

応える間もなく、ギイという鈍い軋み音が天井に響きわたり、幾つもの太い鎖が上下に引きずられ、角材が櫂のように、斜めに持ち上がった。

がらがらと天井が降りてきて、埃が宙に舞いあがり、黒い鏝の粉のようなものが顔面に落ちてきた。

私は、跳ね起きた。

「いや、もうこれで、結構です」

これ以上、刑部氏の狂気に付き合ういわれはない。

6

妻の実家の竹藪は、さらに暗く繁茂してきた。

「切っても切っても、また生えてくるわね」

彼女がカーテンをずらし、窓の外を見ながら、ため息をついた。薄い布越しに、縦の平行線になっている竹の影がそのまま映って、さやさやと揺れている。

「物干し台も、竹の枝が入り込んで、半分、もう使えないのよ。なんとかならないかしら」

私も新聞を置いて、薄暗い庭を見た。

「根っこが地面の下の方を、這いめぐっているのさ。あそまで竹がしっかりしていると、剪定ばさみも、電動バリ

カンも、使い物になりやしない。すっかりしたチェーンソーを買ってこないと、これは無理だな」

天候の悪い夜など、風が吹くと恐ろしい光景となる。

ざわざわと竹が大きく揺すれ、二階の窓ガラスなどは無数の影絵のような触手に触わられているようで、落ち着いていられないのだ。地面は暗いのに、さらに新たな竹が育つ。

次々と伸びてゆく竹の茎。それはまるで私自身の蒼ぐろい鬱屈が、繁茂していくようにも思われた。

刑部邸を尋ねて以来、夜中に急に息苦しくなると、思わず声をあげて飛び起きる癖がついた。隣で妻が「どうしたの？」と怪訝そうに顔をあげるが、私は額の脂汗をぬぐいながら「なんでもない。寝てる」と応える。

彼女は、自分の亭主が倒産の悪夢にまだに怯えているのではないかと訝っている。そのくせ、しばらくすると静かに寝入ってしまい、そのうち鼾すらかき出す。

——あるとき私は、薄っすらと小さな光の射す、狭い部屋に正座していた。周囲は密閉され、びっしりと釘打ちをされた板の隙間から、夕陽らしき朱色の木漏れ日がちらちらと見えていた。座敷牢のような部屋の薄闇の中で、私は焦燥に駆られ、何かをしきりに憤っていた。正座している膝の前に、抜身の短刀が置いてある。

上を見あげると、得体の知れない大きな血肉の塊のよう

み、常軌を逸したような不吉な気配を周囲に漂わせていた。内部にはありえないような急角度で階段が走り、人間の手が届かない数メートルの高さの壁に、衣装や帽子をかける釘がおびただしく打ち込まれていた。かと思うと、屋根を突き破り宙に伸びるような鉄製の梯子が、曇天の空に奇怪なシルエットを見せていたりする。

現代では、しばしばこの奇想建築が、ポストモダンの建築様式などと比較され、論じられたりもされている。

正確な設計図もなくその二笑亭を作った主の渡辺金蔵という人物は、関東大震災後、精神に変調をきたしていたらしい。度重なる奇行から、精神分裂病、今という統合失調症と診断され、とうとう家族に禁治産者にされて、精神病院にぶち込まれてしまった。

主治医となった精神科医の式場隆三郎による著書『二笑亭綺譚』だけが、取り壊し前の現地調査写真も含めた唯一の資料だという。

刑部氏もまた、二笑亭の主のように、ある種の心の病を抱えていたのではないだろうか。あの男は、他愛のない伝説を口実に、自己に心理的肉体的な刑苦を与えたかったのではなからうか。彼の暗いニヒリズムと強迫観念に最もふさわしい不安の形式が、深夜の闇の中を降下してくる凶々しい天井だったのだ。それは、彼が世間と己の人生に復讐

なものが、累々と積み上がっている。金縛りにあったように手足が動かない。あたりいちめん、異様な吐き気をもよおすような腐臭が、立ち込めていた。どんどん真上に増殖していく得体の知れない柔らかな塊は、いまにもどっさり崩れ落ちてきそうであった。

ハッとして目が覚めると、窓の外には竹の影が擦れて、ざわざわと揺れている。背中や腋の下に、厭な寝汗をかいていた。そのときは三時半を過ぎていた。似たような夢を、その後も二度ほど見た。

刑部邸で見せられたあの異様な天井裏の構造は、私を重苦しい気持ちにさせていた。本多正純に同化した刑部氏の鬱屈と、私の鬱病めいた気分が癒着し、まるで時空を超えた暗雲が、有機的に結びついてしまったかのようなであった。奇妙な表現だが、それは三つの鬱屈の塊が連なる心的な感星直列のようなものと思われたのだ。

私は『B級建築—探訪ノート』のコラムのネタを探している偶然見つけたある素人建築を思い出した。

昭和の初め、東京深川の商店街の一角に、一人の資産家の狂人が造ったという奇妙な屋敷があった。

この家は二笑亭と呼ばれ、周囲の子供たちからはけけ物屋敷と怖れられていた。寺の本堂のような薄暗い玄関には、大きな暗いメガネのような五角形の窓が二つ、表通りを睨

するために考案した一人用の拷問器具であったのかも知れない。

『アンタ、自分のこと、好きかね。これまで、生きたいように、生きてこられたかね——』

じっと見上げていると、この竹藪に囲まれた家の天井裏にも、見えない石がごろごろと積んである錯覚に陥ってしまう。それは刑部氏の陰鬱な生霊じみたものが、私の家まで忍び込み棲みつきはじめたかのようなであった。

7

立花氏に教えられた月子さんのカクテル・バーが気に入ったので、翌々週、仕事を終えると、一人で泉町の店を覗いてみた。

時間が早かったせいも、先客はこの間も顔を出していた白髪の老人など、三人ほどの客であった。

「今日は、一人で来ちゃった。また、このあいだのカクテルくださいよ」

「あ、嬉しい。ムーンライト・シャドウ、です。気に入っていただいて、ありがとうございます」

リスのような目鼻立ちをした女パーテナーは、両掌を前ではちんと重ねて、悪戯っぽく微笑んだ。立花氏があれから来たかどうかを尋ねたが、彼もそれほど頻繁に来るわけでもないらしい。

「……じつは、この間のお話、聞こえちゃったんですけど。石って、例の釣天井の石ですか」

「まあ、そうなんだけど」

彼女が興味を持ったことは、意外だった。

「実は、うちにもあるんですよ」

「何が？」

「その、物狂いの石」

「まさか。立花さんも、その話知ってるんですか」

「だって、あの方にそのこと言うと、真剣に怒り出しそうなんだから」

「あはは。確かにね」

「うちのお爺ちゃんが、昔から石が好きで。菊花石とか、蛇文石とか集めているんです。部屋の棚にいっぱい」

「ああ、昔、流行りましたね。てかてかに磨いたりして。ひよつとして、そういうご職業なの？」

「ぜんぜん。県庁に勤めていた堅い役人なんです。父も市役所勤め。公務員一家なんだけど、私だけ、こんな軟派な水商売やってるんです。……でも、祖父の影響で私も、クリスタルとか、ラピスラズリとか、ローズクォーツとかの石が好きになってしまったのかも。パワーストーン系。ちよつとお爺ちゃんの集めている石と、私が興味持っている石とは違う系統なんだけど」

「ああ、そうか。そのクリスタル、綺麗だよな」

「ああ。でも、そうだよな。もともと、陰謀と関わった因縁めいた石なもの」

「でもね、あの石の発している気の悪さから考えると、將軍暗殺の石って、本当にあつたのかしら、なんて思っちゃったりして」

女バーテンダーは口元に手を当て、ポニーテールをゆるしながら、くすぐったそうに笑い出した。

「あのね、お話中、いいかしら」

突然、向こう隣の小柄な老人が、身を乗り出して、口を挟んだ。そして私を見て、大きく目を開いた。

「大谷石工衆って、あなた方、ご存じ？」

先日カウンターにいた白髪頭の品の良い老人だった。金の細縁メガネを掛け、淡いピンク色のアロハ風のシャツがよく似合っていた。コーヒー園でも経営している小金持ちの日系ハワイ人、とでもいった雰囲気だ。

「大谷というのは、大谷石の大谷ね。改修工事の頃、本多正純が使った石工でね、大谷石を扱った石工の集団。西でいえば、比叡山の麓、坂本の穴太衆みたいなもんですかな」

「ほう。城の石垣を作った職人というわけですね」

「そうです。その流れを引く連中が、どうも内職というか、裏仕事で、盛んに釣天井石の紛い物を作っていたらしいの。まるでお釈迦様の仏舎利みたいに小分けにして、わざわざ襖紗に入れてね。……採石場の地下の隠れ洞窟で、こっそ

私は洋酒棚に置いてある手のひらほどもある水晶の一塊を指した。後ろが鏡面になっているので、光の効果で余計に映える。

「あれはヒマラヤ水晶。ちよつと形も違うでしょう。ネパール産で、エネルギーが強くて鋭いの。こっちの青いのがラピスラズリ。ツタンカーメンの黄金のマスクにも使われている碧い石。よく見ると、青の中に細かい金が入っているでしょう」

「へえ。石のエネルギーねえ。わかるんだ、そんなの。」

……月子さんのお爺ちゃんの持っている石って、本当に釣天井に使われたものなの？」

「わかんない。お爺ちゃんのお部屋に、昔からあるから……。そういうふうにいわれている石はあるらしいんだけど、でも、違うと思う。多分、昔、知り合いのインチキ骨董屋につかまされたんだと思います。株とか、競輪とか、前日に枕元においておくと、当たると本人がいうの。本多様のお告げとかいって」

「それは羨ましい」

「ふふつ。勝手にお爺ちゃんがそう思っているだけ。単なる民間信仰。でも石のバイブレーションは、あんまり良くないの」

「え？」

「つまり、石が持っている特有の波動」

り作って、好事家に売っていたという話があるの」

「あ、こちら兎玉先生。埴田町の小児科医のお医者様です」

月子さんが紹介してくれた。

「その話、ちよつとだけ、立花さんに聞いたかな」

「ダメダメ、あの人は頭固いし、正統派過ぎるからね。この話は、一般にはあまり知られていないけど、蛭田恭三郎という近年亡くなった民間の民俗学者の本に紹介されている土地の古老の聞き取り調査によるものです」

「大谷石工衆ねえ。特殊な背景でも持っているのですか」

「どういわけか私は、この町ではウンチク先生ばかりに捕まってしまう。」

「秘密の石工の組合です。まあ、西欧のフリーメイソンみたいなもんですわね。役行者や勝道上人、慈覚大師円仁や日光修験らと裏で繋がっていたともいう。中世から近世にかけての彼らの全貌は、ようやく異端の学者の蛭田翁の研究によって明らかになってきたのですがね。……江戸のある時期、歌舞伎や講談と結びついて、好事家の間で『天井石』を砕いて磨き上げた小石が、秘かな産業となっていたと。誰が呼んだか『物狂いの石』。賢者の石ならぬ、狂者の石だ。例えば、旗本の次男坊、三男坊あたりの道楽者や、吉原の花魁、お調子者の幫間、力士や博徒、町の火消し、そんな連中が、根付のように懐に隠し持っていた。ときには額にすりつけたり、二つの石を火打石のように打ち

付け、カチカチ鳴らしたりする。陰謀や策略やライバル強伏のための悪しき知恵を、死後、冥府の悪しき軍師と化した本多正純から授けられようとして、肌身離さず持っていた……」

「吉原の花魁が、持っていたんですか。それって、ちょっとステキ」と、月子さん。

「花魁だの、太夫だの、花柳界のスターになるには、当時としても厳しい出世レースがあったですから。豊川稲荷にお参りしたり、有名な京都の吉野太夫のお墓にお参りしたりすると、その世界で成功するという信仰があったほどです」

「何だか、いまの芸能界みたいだな。その習慣は、いつごろまで残っていたのですか」

「いや、流行り病のように一世を風靡して、ある時唐突に、下火になってしまった。石工衆はある時を境に、ぱったりと『天井石』を作らなくなったのですな。本多の祟りで、落盤事故が起こったという話もある。大谷の地下は、江戸時代から、地下迷宮のような構造ですから。大事故とか病気とかは、祟りではないかと。しかし、いずれまた、忘れたころに『物狂いの石』は甦る。謀り事を好む人の心の闇が、存在する限りはね」

「人の心の闇、ですか」

「ニンゲンの心ってやつは、いわば地下のラビリンスみた

す。数日してから、鬼怒川の岸辺の杭にボロ布のように引っかかって、小さな土佐衛門になって死んでいるのを、近くの百姓が発見した。……お稲荷信仰や、茶枳尼天のように、少しサジ加減を誤ると、とんでもなく不吉な現象が起きるらしい」

「からくり、からくり、頭がからくり！ うわア。なんか、怖い」

アイスピックで氷を細かく砕きながら、月子さんが妙にはしゃいでいた。

児玉医師による解釈は、以下のようなものだ。

——本多正純は確かに設計図を描いた。日々の務めを終えると、城の改修設計図に手を加え、その余興で、スケッチのような釣天井の仕掛けを細筆で描いた。それは、幕閣間の権力闘争からの慰安であり、無能で陰険な坊ちゃん將軍・秀忠への反発であった。

「夜な夜な書院に籠もって、正純は、行灯の明かりを頼りに一人目を光らせ、釣天井の設計図を描き始めていたので。彼は頭脳明晰で、関ヶ原の戦いときは家康の参謀格だったし、豊臣方の大阪城の堀を埋めるのも、彼の提案だそうです。武家諸法度の草案もね。失脚の理由のひとつに、鉄砲の秘密製造や、本丸の石垣の無断修理があります。まさかそれは正純が、からくりマニアであるゆえん、テク

いなものですよ」

児玉老人は、そこで両手を開くようにして、口先を伸ばし、水鳥のように前屈みになって、マルガリータを囓った。これはカクテルというより、日本酒通がよくやる飲み方だ。

「例えばね、母親が妊娠中、おなかのあたりに『天井石』を入れおくと、賢くて上の覚えめでたい、利発な子供が授かるというのです。正純同様に、若いうちに異常に出世するのだが、あるとき唐突に、ブツンと運が尽きる。事故死してしまふ、狂い死にしまふ、家に火をつけて焼死してしまふ、自らが他人の恨みを買ひ、仇討を招くような酷い振る舞いを演じてしまふ。……あの石はね、破滅への意志、つまり自己破壊衝動を、刺激するんです。自殺マニアの日本人が抱えている、心の病をね」

「破滅へのイシ……。じこはかい、しようどうの、石ですか。なんだか、怪談じみてきた」

老人の灰青色の目は、異様な光を帯びてきた。

「明暦の頃、九歳ぐらいの侍の子で、論語をそらんじたりして、大変賢いので評判だった少年が、石を持たせてしばらくすると、蒼白な顔をして、卒倒するように『からくり、からくり、頭がからくり！』と独り言をいって痙攣を始めるようになった。ある日の夕暮れ時、経文を唱えるようにその言葉を叫び続けたまま、憑かれたように夕日の照りつける畦道を走り出して、もう帰って来なかったそうでした」

「……そんな賢いのに、自分の心のカラクリには、気がつかなかったのでしょうかね？」

私は訝るように、いった。

「そう。頭脳明晰であることと、己を踏みにじりたくなくなるような盲目的な怒りの衝動は、しばしば同居します。ボクは精神科医ではないですがね。——天井が上から迫ってくる。石が落ちてくる。その下にたとえは、あの將軍秀忠がいたら、どんな無惨絵が展開することだろう。彼は、家康のことは崇拜していたが、器の小さい秀忠は、侮っていた。湯殿がいいのか、寝床がいいのか。本多の心の闇が、ハメツヘノイシが、ありもしない絵を描き、からくり釣り天井の設計を始めたのです。権力闘争の息抜きに、推理小説、SF小説を書いたようなものです。現代の官僚もよくやるように……」

しかし文机にしまったはずの図面が、何者かによって盗まれた。城内に、秀忠の姉の加納御前亀姫か、土井や酒井らの幕閣の密者がいたらしい。ついに謀反、將軍暗殺の嫌疑がかり、幕府最有力者からの失脚、出羽横手への流罪ということになった。

「取り調べの際に、正純が理路整然と反論して、身の潔白を明かそうとしたのもいけなかった。日本では、明解な論理を主張することは、悪事よりもむしろ憎まれますからな」以前、古い新聞で見た例の馬場町に置かれていた大岩も、維新前夜のときは、一時、注連縄が巻いてあったというのだ。ちょうど山頂の奥社にある磐座みたいに縄がぐるりと巻かれていたが、すぐに外された。何者かが夜こっそり巻いて、民衆にアピールしたらしい。それは何を意味するかと尋ねてみた。

「あなた、倒幕ですよ。アンチ徳川」

非業の死を遂げた本多正純の二三〇年の怨念が、民衆に感染したともいう。

私はあの異様なからくり釣天井のレプリカを、刑部氏に直接見せられたことを、その場でちよつと告白したいような誘惑に、かられた。しかし結局、最後まで黙っていたのは、あの変人と親しいことは、ここでは恥ずかしく、忌まわしい事のように思われたからである。

8

自尊心が強すぎる相手との付き合いは、言葉使いが面倒くさい。

ひさしぶりに刑部氏から電話がかかってきて、ちよつと

た。ペランダでも洗濯物が干せないし、日中でも部屋がますます暗くなって気が滅入ってしまうと、妻にせつつかれた。確かに湿気も強い。しかしこれを業者任せると、法外な金額を取られてしまう。手伝わせようと思っていた息子の和彦は、クラブ活動の合宿で、日曜夜まで帰って来ない。土曜日、私は意を決して、朝から車で日光街道沿いにあるホームセンターに行った。そしてチェーンソーを買い込み、竹藪を伐採することにした。

機材をセットして、スイッチを入れた途端、いきなり、鋭いサメの歯が並んだようなチェーンが、物凄い勢いで回転を始めた。用意のない私は、思わずその猛烈な勢いに、電動ノコギリを手放しそうになった。それなりの重量感もある。

ふと気づくと、母屋の窓辺から、義父が黙って見ていた。カーテンが少しだけずらされ、暗い影がそこではばらく静止している。

何だか最近、監視されているような気がした。この威圧感、教育者の悪い癖だ。また何かいわれるかも知れないが、ここは無視することにした。

最初は調子良く、竹をスパバと切って、景色が明るくなっていくのに、快感すら覚えた。竹を一本倒すたびに、ぽっかりと青空が広がってゆくのだ。ところが、途中から、心の奥に潜んでいたらしい妙な怒りがむくむくと湧き出し

したことで、諍いがあった。私は単に話の流れの中で、立花氏の指摘している矛盾点を伝えたまでだ。

以前、刑部氏に見せてもらった釣天井の図面に使われている紙が、和紙にしても新しく過ぎるというのが、立花さんの見解であった。いかにも古紙に見せかけてはいるが、江戸どころか、製作は明治期以降のものだろうと。

そのことを言ったとたん、刑部氏は激怒して、この図面はもとよりオリジナルでなく、何度か筆写されたものであるのは、すでに了解済みだ。しかし、だからといって原本が存在しないという理由にはまったくならない、状況証拠としては、あくまで自分の説が正当なのに、お前までが敵陣営に寝返るのか——というのである。

「だったらもう、アンタのことは、私の弟子とも、子分とも、思わん！」

何をいつているのだろう、この男は。私は刑部氏に弟子入りしたようなつもりはないし、子分になったつもりもない。しかも敵陣営？

私は話しているうち、腹立たしくなってきた。二度とこちらから電話してやるものかと、舌打ちをした。それ以来、いつさい連絡をしていない。

いつの間にか梅雨も過ぎて、その年の夏に入っていた。

南面の竹藪の状態が、もはやどうにもならなくなっている。

て、ある種の攻撃的な興奮状態に陥った。どうも、チェーンソーの回転とともに、アドレナリンやらドーパミンやらが分泌され、軽い陶酔状態に入っていくような気がする。

私は、大きな竹が集まっている所に廻り、一番太い竹を数本切り倒した。ザザザッと激しい音がして、斜めに倒れた。しかもその笹の葉のついた小枝を落として、庭の端に重ねておかなければならない。それだけでも、相当疲れてしまった。午後の四時を過ぎた頃には、へとへとになつて戦意喪失となり、残り半分を翌日に残した。一晩おくことにしたのである。

しかし、それがいけなかったようだ。

翌朝の五時過ぎ——。

妻に背中をつつかれて起きると、チェーンソーの甲高い唸り声が、庭先に響いている。覗いてみると、すでに義父が首に白いタオルを巻いて、新しい長靴をはき、竹の伐採に取りかかっていた。

私は驚いて窓を開け「お義父さん」と声をかけた。

「ナニ、あれじゃ、中途半端だったからな。仕事をやるときは、きちんとしまいで、やるものだ」と、そつげなく説教された。

義父は、いつものように背すじを伸ばし、まるで剣道の竹刀を持つようにチェーンソーを斜めに掲げ、上の方の竹と、脇から伸びている梅の枝を、バツサリと一刀斬りに、

落としてみせた。高いところは、背伸びをして片手で切っている。かなり無茶なやり方だ。

妻も心配そうに声をかけたが「なんとということもない」といわれ、それから「黙って、見ていろ」と怒鳴られた。ところが次の瞬間、義父は女の悲鳴のような大声を上げて、竹の中に倒れ込んだ。私と妻があわてて駆け寄って行ったときは、すでに足から真っ赤な鮮血を流して、前屈みになって呻いていた。しばらくして、騒ぎを聞きつけた老母も家から飛び出してきて、古ぼけた薬箱を抱え、おろおろしている。

——すぐに救急病院に連れていった。何とか大事には、至らなかつた。要するに、刃先がコードに触れて切断され、金色の火花が散った瞬間、彼は驚いて、手を放してしまつたようなのである。

幸い、チェーンソーの刃そのものは、長靴を大きく裂いて巻き込んだあと、左足の甲あたりをかすつた程度で済んだ。新品のつるつるの黒長靴は、解体された魚のように、切れ端が鋭くめくれていた。血はかなり流れたものの、太い血管を切つたわけでもなく、むしろ転んだ瞬間に古い切株にぶつかり、腰を強く痛めたらしい。

「もう、お父さん、年考えてよ。そういうの、年寄の冷や水っていうの。勝手に慣れない道具、使うもんじゃないわよ」
「馬鹿もん。何をいっとるか。かなり竹を切り残していた

その三月十一日、あの震災が起こつたのである。

9

——あれから時代が、すっかり変わったようだ。

日本全体が、別の国に変貌してしまつたかのようであつた。あらゆる信頼されていた秩序や権威や制度が、がらがらと音を立てて崩壊してしまつた。政治も、企業も、官僚機構も、嘘に嘘を塗り重ねたものであることが顕わになつた。

あるいは、もともと無理な制度設計であつたものが、すでに腐食して空洞化し、長年の矛盾と腐敗の重みに耐えきれなくなつたのだろうか。ついに古い柱が折れ、吊り上げていた縄や鎖が切れ、この国の中央を支えていた屋台骨が、一気に崩落してしまつたのかも知れない。

しかも、危機に乗じて、奇妙に国家の力が強まつていった。思いもよらぬ新たな法案が次々と通り、それに反対する市民運動やデモなども、何やら後ろめたいことでもあつかうような、暗黙の空気ができつあつた。

まるで日本民族全体が、何か得体の知れないものに憑かれて灰色のレミングの群れと化し、大いなる破滅へと向かつて進んでいくようでもあつた。

時代はいよいよ閉塞状況の中を迷い、私が一時期、深夜によくうなされていた、びっしりと釘打ち板打ちされた座敷牢の悪夢のように、息苦しくなつていった。

からな。みつともない。……志郎クンの、ああいうところが、いかんだ。会社だつて何だつて、途中でほっぽり出して」
余計なお世話である。

要するに、自分なら、もっと上手く切つてみせるというくだらない見栄だつたのだろう。

妻はあやすように冗談を言いながら、その後も母屋のリビングで、よく頑固爺イを手当していた。こんな機会でもなければ、この気の強い親子は親密な会話などできなかったはずだ。それなりに水入らずの雰囲気、父も娘も、妙に楽しそうに見えた。

その後も義父は、不満そうに口を尖らせて結び、しばらく松葉杖をついて、庭先をよろよろと歩いていた。子供たちの剣道の指導ができないことを、しきりに悔しがつていた。

ただ、何よりも腹立たしかつたのは、「娘婿が庭仕事を中途半端に放り出したせいで、こんな災難に遭つてしまつた」という、義父がひねり出して、近所の閉居仲間や俳句仲間の老人連に言いふらしている奇怪な屁理屈であつた。あいかかわらず、決して自分の否は認めようとはしない。

とはいうものの、何とか無事に、その年も越すことができた。そして、父の足の傷もすっかり癒えて、ようやく腰の具合もよくなつてきて、翌年の春を迎えた。

昭和四丁目の実家は古い家だつたが、幸いにも地震の被害は少なく、台所の食器や書棚の本が落ちた程度で済んだ。むしろ、何段もの棚に商品が積み上げられた会社の工場の混乱の方が大きく、そちらの整理や補修、さらに、仕入先や納入先の被害状況の確認などで大わらわだつた。

地震から二、三か月の間は、何度も大きな余震が起こつてしまひ、あの時の恐怖が生々しく甦つた。

なおかつ福島原発問題、放射能問題で、不穏な日々が続いた。いわば東北から関東に到る居住空間のすべてが、いつ塵土になるかわからないという、危機的なサイコロ賭博の対象に変えられてしまつたのだ。

どろどろに融けた高熱の鉄とコンクリートの禍々しいシチューが、こうしている間も、放射能の湯気を放ちながら煮えたぎり、暗い地下深くをえぐり、日々メルトダウンしながら掘り進んでいく——そんなことを思うと、いても立っていられなかつた。しかもこの地震国に、五十四基もの地雷のような原発である。私は目隠ししながら破滅へと向かう現在の日本が、あの刑部邸の狂気じみたからくり仕掛けと、重なつて見えた。

世の中が異様に緊迫した空気から解放されたのは、あの震災からだいぶ経つてからのことであろうか。

それでも、無論、何も解決されておらず、われわれは、単に不安と恐怖に麻痺しているだけであり、汚水貯蔵タンクや、放射性物質の泥を詰め込んだ真つ黒な袋は、緑の野山にグロテスクに積み重なって、今後も無限に増えていく。

それとは対照的に、私自身の生活は、震災の翌年あたりから奇妙に騒がしくなってきた。

社長は二代目だったが、なかなかのやり手で、この混乱のさなか、積極的売り込みを行った。このがっしりとした体格の二代目は、大学のラグビー部にいたというが、直感型で判断が早く、的確だった。食材の放射能汚染問題なども、早くから先手を打っていたようである。そして、社長も参加する全体ミーティングで、現場の意見を求められるようになったことから、私自身の職場状況が変化してきた。

商品管理・食材管理の地味なコンピュータ作業から、もう少し梓の大きな場を与えられた。食材の選択・購入や、新たなメニューの発掘提案などまで、課題として与えられるようになった。もちろん、産地や汚染問題なども、ある程度は自分で調査しなければならぬ。以前から社長が狙っている試験的な居酒屋出店の企画会議などにも、参加するようになった。これは発想の柔軟な若手社員との活発なディスカッションもあり、その後でマーケティングと称して、社長も含めて夜の飲み屋街に繰り出すという、なかなか

か楽しい経験だった。いまでは関連グループの小山工場との連絡なども、次第に私の担当となりつつある。

義父に紹介された会社なので、ようやくこれで私も、多少は顔を立てたことになる。

倒産以来の鬱屈感情も和らいできた。竹藪をすっかり切り落として、庭先風景が明るくなってからは、あの得体の知れない釘打ちの部屋に幽閉されたような悪夢も、見ることが稀になった。

私は仕事の方で手一杯になって来て、そうこうするうち、趣味と自己治療を兼ねた『B級建築―探訪ノート』の更新も怠りがちになった。不動産屋の立花氏とは、震災後に一度、電話で連絡をしたままであった。

——ある金曜日、その立花氏から連絡があった。

貴方の捜していた物件に近いものがあるという。部屋の話である。正直いって今頃になって何だろうと、私は思った。義父はあの竹藪伐採での怪我以来、病院に行くにも、趣味の俳句の会にも、私の車での送迎を頼らざるをえなくなり、立場が幾分逆転しつつあった。

「悪いな、いつも」

車の後部座席に乗せると、義父はふんぞり返って腕を組んだまま、口をへの字にして、不本意な口ぶりであった。私は内心、ほくそえんだ。

扱いにくい頑固者ではあるが、金銭などには恬淡としており、もともと悪いヒトではない。自分のことさえ奉ってもらえれば、物の見方は公平で、さっぱりしている。そして義父はもう、細かい事には口出ししなくなっていた。

しかもこの震災がきっかけで、物置同然になっていた西側の部屋を整理したことにより、ずいぶんとスッキリとしてきた。その空いた六畳の部屋は、われわれ東京組の新入り家族が使つてよいことになった。

そんなわけで、不動産屋の立花氏には、部屋を捜す必要はないと応えた。ただ、世間話をしているうちに、久しぶりに月子さんの店を覗いてみよう、ということになったのである。

その日、泉町の『カクテル・ムーン』には、私が先に到着した。

ジントニックを飲んでいるうち、立花氏がやってきた。震災前後のごたごたについては、互いにつもる話も多かった。立花氏は、宮城の親類の家が一部被災し、その手伝いにも何度か行ってきたらしい。といつても、最悪の事態ではなく、従兄弟夫婦その他は全員無事で、被害は建造物の倒壊と浸水に留まったようだ。

私は、実のところ前から気になっていた刑部氏のことについて、恐るおそる尋ねてみた。

「知らなかったんですか」彼は鈍いつるな眼で、私を見た。「——あの人は、亡くなりましたよ」

あまりにもそつげなく、そういわれた。

おぼろげな予感が的中したので、私はむしろ、意外に思った。「亡くなったって……。例の三月十一日に、ですか」

「いや。それがよく、わからないのですよ。てっきり、向坂さんの方が、事情に詳しいとばかり思っていたけど」

困ったような顔をして、彼はソルティドッグを飲んだ。

八時を過ぎると、客が次第に混んできた。

「あそこの自宅で発見されたそうですがね。それも、だいぶ時間が過ぎていたらしい。たしか、一週間か十日後とか」

「やはり、あの天井が崩れ落ちて？」

立花氏は、両腕を組んで、洋酒棚をじっと見た。

「そうだと、わかりやすいのですがね。……正確にいうと、直接の原因が、石の下敷きになって死んだのか、それともすでに、脳卒中とか心筋梗塞とかで倒れていた上に、石が崩れ落ちてきたのか、はっきりしない。あの路地周辺に幾つか古びたアパートがあります、業者に追い出しにかかれて、一二年前から、誰も住んでいない状態なんです。街中なのに、空き地も多い。だいたい前から、オサカベさんの手を離れているしね。リサイクルショップの東側は、建

物もすっかり取り壊されて整地され、小さな駐車場になっ

ている。もともと、近所ともほとんど付き合ひもなく、耳の遠い八十過ぎの婆さんが、手前の道の角の家に一人暮らししているだけです。発見された日も、ちよつと離れたところのクリーニング屋の店主が、異臭がしている方向を探っていくと、あのオサカベ邸に辿りついたという……」

私も地震の後、部屋を片付けているとき、ふと、刑部氏の顔が目につかんだことがある。

以前の電話でのしこりがそのままになっていたし、それはあまりにも嫌な想像だったので、無意識に覆い隠してしまつたようだ。あの時、即座に電話すればよかつたと思つた。しかし、その場合は、この私が第一発見者となつたかも知れない。

「考えてみると、なんだか、あの人らしいですね」

「まあ、かなり遺体の損傷は、ひどい状態だつたらしい。物理的のだけじゃなくて、つまり、その、腐乱状態がね」

目の前に、落下してきた岩や、木材や、瓦礫に埋もれ、前のめりでうつ伏せに埋まつた刑部氏の嫌な光景が、目につかんだ。ハンチングを被つたまま、埃だらけの背中を見せた遺体のイメージであつた。

しかし、そんな無残な出来事も、ここから北の地域では、さほど珍しいことではないはずだ。

憎たらしい人物ではあつたが、いざこやなつてみると、何とも言えぬ虚しさの混じつた悲痛感が走つた。

向こう側では、月子さんと二人の常連客が、何か楽しげに冗談を言い合つていた。

「死に場所を探すという言葉があるが、あのヒトは、ずつと死に時を探していたんです。あれじゃ、住まいそのものが、ギロチンみたいなもんだ。ちよつとした偶然の物理的なきつかけで、あの世に直行できるようになつているのだから」

驚いたことに彼は、涙を浮かべていた。

「自作した天井に、うず高く石を積んでいたのですよ、あの狂人。鎖と歯車をつけて、階段の裏側から綱で巻き上げるような仕掛けになつていた。伝えられる古文書と絵図の通りに。もちろんそんなものは、後世出回つた二セモノに過ぎないんだが、その通りに再現してみせた」

私はさつきから、言おうか言うまいか迷つていた。

しかし、こゝなつてしまつた以上はという思いがつのり、告白した。

「じつは私、見たんですよ。あのからくり天井のレプリカ。コーヒーまでごちそうになつたのです」

もともと大きな立花氏の顔が、カウンターの照明に照らされて、てらてらと光り、さらに巨大に見えた。

涙でいっぱいになつたどんぐり眼をこちらに向けて、うつすらと笑つた。

「おいしかったでしょう、あそこのコーヒー」

「あの方と、震災の何ヶ月か前に、ちよつとしたいぎごぎがありましてね。単なる行き違いなんです。その後、電話がしにくい状態になつてしまつたんです。それに震災の前後あたりから、私も仕事の方で忙しくなつてきて」

さすがに、立花氏の言葉を伝えたら相手が激怒したとは、伝えにくい。

「なに、皆、そうなんです。あのタランチュラ野郎とはね。うまく行きようがないんだ」

最初、立花氏は、故人を偲ぶような、とつとつとした口調だつたものの、話しているうちに異様に興奮していくのであつた。

「……そりゃそうなるはずですよ。あんな地震、普通だつて相当に危なかつたのに、そういう仕掛けをわざわざ組み上げていたんだから。あれはねえ、私にいわせれば、自殺のための装置ですよ。自殺機械ですよ。石でこさえたロシアン・ルーレットですよ」

「立花さん。ちよつと声が、大きいようです」

私はまだ、刑部憲造氏の死と、あの刑部邸の崩壊という事実を、受け入れられなかつた。

「あんた自分のこと、好きかね。これまで、生きたいように、生きて来られたかね」

あの男がそんな言葉を囁いた時の異様に光る義眼のような冷たい目つきを、思い出した。

「ええ。妙においしかったです」

「ハワイコナの高級品を、使っているんです。新婚旅行のハワイで見つけてきた、奈緒さんお気に入り」

それから思い出すようにいつた。

「神棚が、ありませんでしたか？」

彼もやはり案内されたことがあるらしい。

「ありました。奈緒さんの名前が出ていた」

「……守り切れなかつたんだな、彼女も」

それから立花氏は、急に無口になつて、二、三杯、ジントニックを煽つた。彼らしくもない乱れ方で、何だかカクテルの飲み方ではないような気がした。

私もいまだに、ここ数年続いてきた不安定な鬱病めいた気分を持て余している状態だつた。誰もが、自分の心の暗い仕掛けに足を取られ、巻き込まれてしまふのか、そんなことも思つた。

私は気を取り直して、今日は店に来ていない児玉老人の話をした。

たとえば、謎めいた江戸期の大谷石工衆の話や、物狂いの石を握つたまま「からくり、からくり、頭がからくり！」と叫びながら真つ赤な夕日の畦道に消えて行つた少年の話や、児玉さんによる正純評や、釣天井事件への推理談義を話した。

しかし彼は、つまらなさそうに、「兎玉センセイみたいな考え方もあるでしょう。まあ、いいんじゃないですか、いろいろな解釈があつてね」と投げやりにいった。

以前のあの郷土史に対する情熱は、いったい何だったのだろうと私は思った。

と、突然、彼は顔をあげ、両手の拳をテーブルに叩きつけ、叫ぶようにいった。

「——誰だって、無謀な將軍や暴君なんて奴ア、ぶっ殺してやりたいと思うじゃありませんか。そもそも、いつの時代でも、権力者とか政治家なんて奴らは、何様だと思ってるんですか。ありやね、当時の江戸の民衆の魂が望んだ本音なんですよ。ありとあらゆる偉そうな、民百姓を虫けらだと思ってる傲慢な権力者の頭上に、石が落下してくればいい。歴史の天井裏に、累々と怨念のように積み上げられた石が、いつか、どつと、天罰のように、いっきよに崩れ落ちるんだ。どうせ、世の中全体が、からくり屋敷なんだ。いっそのこと、首相官邸に釣天井でも、仕掛けてやればいいんだ」

数人の客達が、こちらを不審げに見て、ざわついた。

「あら、今日はどうしちゃったのかしら、立花さん」

月子さんがおどけて、片手で大型犬でもなだめるような仕草をした。そして、「ハイ！」と新しい蒸しタオルを手渡した。

た。二人とも、すっかり酔っぱらっていた。

私の家はここから歩いて十数分、立花氏の方は大通りに出てから、タクシーを拾うという。

「どうです。いつか今度、刑部さんの墓参りにでも行きませんか」

「……ああ。それもいいですね」

あのままになってしまったことに、多少の悔いもあった。これも何かの縁だろうと思った。おそらくあんな偏屈男の墓に、花や線香を供える者など誰もいないだろう。

「考えてみりゃ、あのバロン・オサカベもね、ありやあれで、はた迷惑だが媚びへつらいなく、ふてぶてしく生きてきたヤツです。僕にとつては憎たらしい男だった。……カプト虫やクワガタ採りやら、小川でのフナ採りやら、いろんな遊びを教えてもらった先輩でもあり、少年時代の兄貴分でもあったのです。そう。この街の風景もずいぶん変わったもんです。県庁の北西に広がっていた田圃では、いまでは住宅街や、ファミリー・レストランが立ち並んでいる。昔はあの奥にも見事な水田が広がり、その向こうの菜の花畑には小川が流れ、ドジョウやフナが身を潜めていた。夏の夜になると星空の下で、いっせいに田圃の蛙が鳴きだすんです。……そう。あそこの刑部さんとこの路地で、キャッチボールをやったこともあるし、奈緒さんと三人で寺の境内やお墓に潜り込み、隠れんぼうをして、坊さんに

「いや、ナニ。……ここに、危険思想家が一人いるのですよ」私は笑って、混ぜ返した。「確かにねえ。いまのこの空気だと、また、戦前の特高や憲兵なんかも、復活しかねない時代ですしね」

「だいじょうぶ」女パーテンドーがいった。「わたし、難しいことはわかんないけど。でもこの店の中だけは、最後まで、言論の自由を守りますから」

そして右手で、小さな力こぶを作つて、笑つてみせた。いいぞお、月子姫。ブラボオ——。

隣の常連客から声がかかった。

そこで和らいだ笑いが起つた。彼女は理屈屋の中年男たちのアイドルなのだ。

憑きものが落ちたように、立花氏は、目をしょぼしょぼさせた。それから急に気を取り直して、

「よし。それじゃ、月子ちゃん。ムーンライト・シャドウを三つ」といった。「ね、三人で、オサカベ男爵に献杯だ。ここは僕の奢りということだ」

そういつて立花氏は、泣き笑いのような顔をして、湯気の立つ白いタオルを大きな顔にあて、いささか品なく、ごしごしとこすつた。

——われわれは十時過ぎに店を出た。

外では少し小雨が降つたらしく、路上が藍色に滲んでい

とっ捕まつて叱られたこともある」

彼は訴えるように、大きな顔をこちらに向けた。

「カクレンボ、ですか」

「行きませんか、墓参り。彼の墓は、奈緒さんの墓でもあるんだ」

「そりゃ、そうだ……。じゃあ、今月から来月あたり、お天氣のいい日に、バロン・オサカベの供養にでもまいりますか」

私がそういうと、立花氏の足取りが、心なしか浮き浮きしてきたようでもあった。

雲が割れ、細い金色の月が出ていた。

雑居ビルの間の青黒い路をしばらく歩いたあと、彼はくると振り向いた。

「——その墓石がね、おそらく物狂いの石、天井石を使っているのですよ」

不意に、頭を強く打たれたような気がした。

そして私は、刑部氏が自説の最後の隠し玉として、いわくつきの大きな石を所有しているという話を、思い出した。「あのヒトらしいと思いませんか。生前から用意していた墓でね。ちようど……」

立花氏は、そこで子供を両手で抱えるような、奇妙な恰好をした。「このぐらいの、大きさの、卵型の石だ。ひよつとした

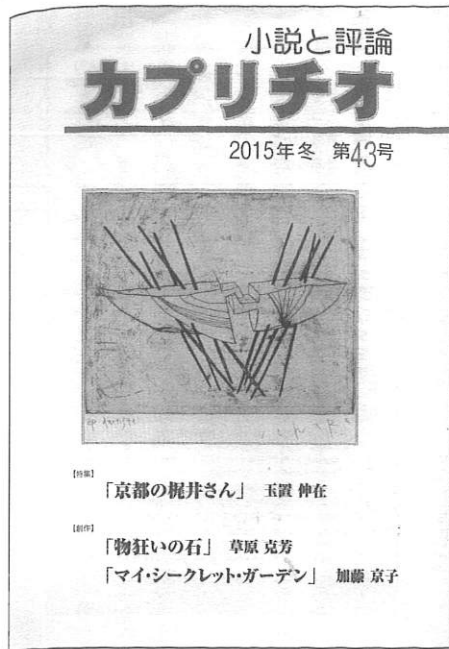
ら、本物の可能性もある。墓はね、北見霊園にあるのですよ。あの丘陵の上の方だ。何だか特等席みたいないい場所で、それはそれは堂々としててね。夕陽を浴びて、大きな丸い石が、あかあかと輝くんのだ。……ちよっと、あの執念だけは、凄いでしょ」

私は両手首から、血が引いていくのを感じた。

並んだ飲食店の明かりが、狭い紫色の川の水にゆらめきながら映っていた。

二人はそのまま細い小橋を渡り、酔い覚ましのために、しばらく無言で歩き続けた。

(「カプリチオ」43号より転載)



カプリチオ 東京都

幻のアンソロジー『カプリチオ傑作集』を夢見て

■『カプリチオ』とは、音楽ジャンルでいう奇想曲・狂想曲のこと。別に特有の形式があるわけでもなく、自由でとらわれない発想による曲を言うようです。イタリア語では「気まぐれ」の意味。したがって、こんな言葉を雑誌名にしている同人誌ですから、内容は、まあ、その、推して知るべし、であります。

しかし、芸術文化というものは、そもそもがイメージネーションの自在性や、「精神の自由」を元本として表現されるわけでありますから、文学にとっては本源的なコンセプト、といってもいいはず。年二回発行、現在は四十四号。同人誌の寿命として、これが長いのか短いのか、よくわかりません。ともかくも「文学の気まぐれ」は、二十年以上持続したわけです。バックナンバーをめくってみれば、なかなかの名作・傑作揃い(同人誌名物の仲間褒め!)。いつの日にか短編アンソロジー『カプリチオ傑作集』でも出せたらいいなア、と愚考しております。

■近年ますます『カプリチオ』同人の創作意欲は旺盛です。長年、下町で開業医をされてきた関谷雄高氏は、これまで

くさはら かつよし

草原克芳



1956年宇都宮市生まれ
中央大学文学部中退
広告代理店、制作プロダクション、通販会社に勤務
文芸同人誌『カプリチオ』編集発行
世田谷文学賞受賞(第13回「ドラキュラのいる客間」第14回「夏草の酒」)
作品に『プラハの人形遣い』『建築家の檻』『アスベラトゥス雲』『庭師と四人の女たち』『人間ポンプの女』などがある
評論『地下生活者としての夏目漱石』『『砂の女』と『箱男』』他 インターネットではGrasshouseの名で電子書籍を公開
2013「下北沢路地裏ツアー」で第6回まほろば賞優秀賞受賞



医師と患者の人間的な問題を「外科手術」という極限状況をからめて、芸術家小説を思わせる求道性で追究されて来られた。氏の作品を読むと、現代のパソコン画面を睨んでいるお医者さんより、ずっと患者との関係性が濃密だったと思います。と同時に、一連の作品は、東京下町の戦後史にもなっていた。しかし、ここに来て、八十半ばを超え、刮目の新境地を開かれた。次号掲載「白く長い橋」。関谷氏は、宇宙、魂、神性(特定の宗教ではなく、絶対性を求める人間の心)といった困難なヴィジョンに手をかけ始めた。凄いいことだと思います。

■この「動」の関谷氏に対して、作風としては「静」の石井利秋氏。清涼感のあるかつちりとした作風の短編で、私も「灯台」などの読後感をいまだに覚えています。家族で岬の灯台に行つて写真を撮る話なのですが、なんとなく、小津安二郎の映画と同じ、静かな微風が吹いているような……。石井さんは元教育者で、合評会では歯に衣を着せることのできない騒がしいカプリチオ同人の中では、唯一、人権派弁護士役を買っていただけの長老的人格者でもあります。先号では犀利なロブ・グリエ論をものして、われわれを唸らせてくれました。

■『カプリチオ』の実質的な編集長である塚田吉昭氏は、昨年、これまでの短中篇約二〇作をまとめて『迷宮肖像』という単行本を出版。二段組みで全三八七ページ、塚田氏



「カプリチオ」合評会。6/5夕留の喫茶店、会議ルームにて

の文学活動二十年の結晶体。傾向が色々あり過ぎて、「せんねんやうなぎ」がいいとか、「名越切通」^{なごきりどおし}「白骨温泉」が傑作だとか、「言の葉」が捨てがたいとか、同人の間でも、好みは分かれず。内田百閒^{ひゃくかん}とも、ジョイス「ダブリン市民」^{ダブリン市民}とも、江戸川乱歩ともつかぬ幻想的な作風は、現実を成立させている公式を、さりげなくひっくり返し、世の不条理性を垣間見させてくれます。お金とお時間のある方は、その……まあ……買ってあげてください。（連絡先／言海書房 TEL 03・5761・9988）

■合評会後の三次会では、華麗なる歌姫に変貌する加藤京子氏は、毎回、新しい作風で驚かせてくれます。以前は、ミュージシャンの生きざま、アウトサイダー達のコミューン、現実社会との齟齬を巡る葛藤、天使的な少年^{てんし的なしょうねん}等を描いた感性豊かでファンタジックな作風でした。最近では、緻密な文体を研ぎ澄ませ、ある種のヌーボーロマンを思わせる、静謐でミステリアスな詩的世界を構築しつつあるようです。四十四号掲載『マドリッド その翳りのなかへ』。先日、インターネットの「関東文芸同人誌交流会の掲示板」を覗いたら、作家・評論家の根保孝栄氏が「白黒画面の映画のような沈鬱な町並みの描写」の魅力を評しておられた。これはまったく同感です。

■玉置伸在氏の小説は、内省と行動、抒情性とある種の超越性への希求とが、微妙なバランスの中で均衡を保っている。

ます。バイク乗りの青年の破滅的詩情を描いた「夏空のエンジン」^{エンジン}、銭湯と火葬場という特異な設定の「八月の放物線」^{放物線}（次号）も好評。若野信二氏は、詩的イメージのある散文の使い手。とくに故郷の山形を描いた短編「早い流れの川」は、S・アンダーソンを連想させる味わい深いものでした。近いうち、あの名編を超える傑作をものされることでしょうか。作品は書かないけれども、的確で鋭いコメントを吐き、数匹の猫と戯れ、自宅の屋上庭園でせっせと妖しい果实を栽培している謎の怪人が中村豊氏。風貌もロシアの文豪やアナキストを思わせ、そのうち何か、物凄いものを書きそうな気配……なのだけでも。

■新年早々、残念なことに、訃報がありました。長年、カプリチオ合評会のご意見番であった谷口葉子氏が、この二月に癌で逝去。氏の作風は、隅々まで作り込んだメリハリ

のある短編で「あふりかすみれ幻想」などは想像力豊かな洒落た短編でした。先に触れた関東文芸同人誌の掲示板で、前号の「深海ホテルへ」や、五年前の作品「冬のとびら」が新たに論評されました。病状の進行があまりに早く、そのコメントを伝えられなかったのが悔やまれます。谷口さんは病床でも、最期まで自分の文章を気にかかられ、その気迫には「女文士」を感じました。かぐわしき名エッセイ「私の心に残る花 藤」、集中治療室の幻覚を描いた小説「まぼろしに遊ぶ」が、未完の絶筆に――。

■最後に、出版社として多忙な中で、『カプリチオ』の編集校正作業を担当してくれているのが、言海書房の水野肇氏。ここ二、三号、文学史・出版史の裏事情をめぐる楽しくも辛辣なエッセイを連載。四四号は仮名垣魯文の「安愚楽鍋」^{あんぐらくわく}です。独特の文体で読ませる社会諷刺的な戯評となっています。

——というわけで、ちゃっかりと、宣伝と販促をかねている「カプリチオ」の同人紹介でありました。

（草原克芳）



塚田吉昭「迷宮肖像」

カプリチオ 事務局

二都文学の会

〒一四二・〇〇四二

東京都品川区豊町六・六・一七

塚田吉昭方 ☎ 03・6325・1202

送り火の夜

津田一孝

今は何年の何月なのだろうか。山奥の廃屋にはテレビもラジオもないし、新聞は木食い虫に白く侵食された床に散らばっている腐葉土色の古新聞しかない。だから、日にちを確かめることができないのだ。朝が来て夜が来ると一日の変化は感じ取ることができない。しかし、柱や板壁に傷をつけたりして朝が来た回数を記録してこなかったのだ。この廃村へ来てから何日が過ぎたのか定かではないのだ。できることといえば、日差しの強さや木の葉の色の変化を眺めながら季節の移り変りを推し測るくらいのことだ。

廃村にはかつてここから何軒か先の家に祖父母が住んでいた。そういう記憶は残っているが、事実なのかそれとも孤独がもたらす妄想に過ぎないのか、今となっては確かめ

帰っていくこともある。

人の気配を感じると、私は草叢くさむらなどに身を隠し、呼吸する音すら立てないように気をつけながら静かにしている。私は逃亡犯ではないし、過大な負債を背負って逃げ回っている多重債務者でもない。だから、身を隠す必要はないのだが、廃村に潜んでいるという事実は誰にも知られたくないのだ。なぜなら、人間というおぞましい生き物は虫やネズミと違って何をするか分からないからだ。

そうなのだ。山の中の廃村に一人で暮らしている私にとって、最大の危険は自然の脅威などではなく、人に見つかってしまうことだ。目撃者がいなければ人間は好き勝手なことができるし、好き勝手なことをしたがるものだ。日頃は隠蔽している欲望を剥き出しにして、したい放題のことをしたりする。だから、見つけられたら、私は何をされるか分からない。捕まえられ、縛り上げられ、いわれのない暴力を加えられる危険性はきわめて高いと言わざるを得ないはずだ。

もちろん、そのような人ばかりではないだろう。ところがある。人のいない山の中には、親切そうにしている人の顔に残酷な表情を浮かび上がらせてしまう妖しい気配が漂っているからだ。

事実、この廃村へ来てから、女の人が襲われているのを

ることができない。この村にくわしい誰かに質問したくても誰も住んでいないからだ。住んでいる人がいなければ訪ねてくる人もいない。廃屋の中にまでやってくるのは、体の一部が不自然に肥大している名前の分からない虫や齧る対象物を求めてうろつきまわるネズミぐらいしかない。

今日この頃の変化は、深夜でも寒さがやわらぎ、樹木の葉がこんもりしてきて、太陽が真上にある時には日差しがかなり強くなってきたことだ。間違はなく夏に向かう季節なのだろう。この季節には時々人がやってくる。大抵は大きなリュックサックを背負った男たちだ。女連れであったり家族連れであったりすることもある。時には作業着姿の人たちが数人でやって来て何かを調べ、用紙に記録して

目撃したことがあった。車で連れて来られた女の人が、同じ車に乗ってきた三人の若い男にさんざんもてあそ玩ばれ、最後は首を絞められて殺されてしまったのだ。三人はどここの街にでもふらふら漂っているような軽い感じの男たちだった。ここが街中だったら、人通りのある白昼の路上で女の人を遊ぶような真似はしなかっただろうし、無造作に首を締めたりもしなかっただろう。人気がない山奥という環境がそうさせたのだ。

もちろん、私は女の人を助けに行かなかった。行けば間違はなく私も同じ目に遭わされただろう。男の私には、簡単には死ぬことのできないようなもつと残酷な暴力を加えられたかもしれない。三人の男は、殺した女の人を草叢の中へ放り投げるとそのまま車に乗り、カーステレオからにぎやかな音楽を流しながら去っていった。

何回も経験してきたはずの山の夏だが、今年はいつもの夏とは違っていた。侵入者が来たわけでもないのに、どこからともなく囁くような人の声が聞こえてきたのだ。声は日ごとに大きくなってきて、一度会いに来てくれないだろうか、というはつきりした言葉になった。聞き覚えのある声だった。長い間会っていないので定かではないが、おそらく遠山の声だろう。

ここにいない遠山の声が聞こえてきても、私は驚いたりしなかった。山の中の廃村では、他界しているはずの祖

父母の声が聞こえてきたりすることがよくあるからだ。殺されて草叢に捨てられた女の人が茫然とした表情で歩き回っているのを見掛けたこともある。

しばらくして、声は手紙になってやってきた。帽子を目深に被った青白い顔の郵便局員が届けてくれたのだ。郵便局員は骨を薄皮で覆ったような細い手で、手紙をほとりとポストの中に落とし、そのまま姿を消した。手紙には血のように赤い震える文字が書かれていた。苦しみの滲み出ている手紙だった。こんな手紙までくれる遠山の気持ちを見無視することはできないので、私はしかたなく山を下り、盆地の底に広がる街中へ足を踏み入れた。

街中には至る所に情報が書き込んであるので、今が八月であることも、各地に集中豪雨をもたらした台風が過ぎ去ったばかりであることも分かった。山の中でもものすごい雨が降り、激しい風が吹き、渓谷には濁流が流れていたが、あれは山の精霊が人の支配する世の中を呪って怒り狂っていたのではなく、台風のせいだったのだ。

周囲を山々に囲まれ、湿地を這うように広がる街は厚い灰色の雲で覆われていて、街の中心部を流れている川も増水していた。流れが激しく水が濁っている。私は川原に足を止め、どよめく流れを眺めた。

濁流に向かつて三人の釣り人が竿を握っていた。その少し後ろに、嘴と脚の長い大きな二羽の白い鳥が立っていて代謝疾患の治療で知られる病院に半年近く入院しているとのことだった。長期入院の患者が音信不通の古い友人にぜひ会いたいと思うのは、病気が相当に重いということなのだろうか。先が長くないのかもしれない。

病院へは迷うことなく辿り着くことができた。痩せた蔓草の絡まる赤茶けた病院だった。医師も看護師も患者もまばらで、薄暗く寂しい廊下を涼しい風が吹き抜けている。遠山の病室は、階段で二階へ上がり、黒光りする長い廊下の先にあった。四人部屋なのに遠山しかいなかった。

気分が多少は良かったのか、遠山はベッドの上に座っていた。何がいるのか、じっと前方を見つめていて、私が近づいていくと顔をゆっくりこちらへ向けた。肥満気味だった大学生の頃の面影はなく、肌が透き通るくらいに青白く痩せていた。顔は頭蓋骨に皮を貼りつけたようで、髪も抜け落ちて乱れている。遠山ではない知らない誰かであり、部屋を間違えたのかもしれない、と思ったが、やつれてはいても確かに記憶に残っている遠山の目をしている。

「遠山だよな」

尋ねると、ベッドの上の男は答えた。

「俺に見えないか？」

聞き覚えのある声だった。

「随分、変わってしまったものだから」

遠山は溜め息をつくように言った。

釣り人を眺めている。釣った魚をもらおうとしているのかもしれない。一羽はもう一羽より体が小さい。親子なのかもしれないなかった。

私は鳥に近づいていった。手を伸ばせば長い首に触れることができるくらいに近づいても、鳥は逃げなかった。私は鳥のすぐ横にしゃがんで釣り人を眺めていた。

魚は釣れそうになかった。それでも、二羽の鳥は待ち続けている。私は話し掛けたくなって鳥を見た。見詰められる気配を感じたのか、あるいは話し掛けたい私の気持ちが通じたのか、二羽の鳥も私を見た。目と目が会った。

間近に見る二羽の鳥の目は、それぞれになつかしい誰かの目に似ていた。二羽の鳥はその人たちの生まれ変わりののだろうか。よく知っている人のはずなのに思い出せなかった。話し掛けてみたかったが、何を話せばいいのかわからない。鳥の頭の白い羽が風になびいていて、私が何も言えないでいると、二羽の鳥は再び川の方へ目を移した。

遠山邦彦は私と同じ大学の同じ学部に通い、同じ下宿で暮らしていた。四年間をともに過ごした仲だったが、卒業後数回会って、それからは音信が途絶えてしまい、年賀状を出し合うことすらなくなった。すでに二十数年が過ぎ、二人とももうすぐ五十歳という年齢になっている。

赤い震える文字で書かれた手紙によると、遠山は内分泌

「そうだろうな。自分でも自分でないように思えることがある」

「具合はどうだい？」

「ご覧の通りだよ」

ひどいやつれようなので、病状について尋ねる気にはなれなかった。遠山が懐かしそうに私を眺めている。

「おまえは元氣そうだな」

「そう見えるだけで、似たようなものだよ」

「そうか。似たようなものか。おまえも騙すより騙される側の人間だからな」

こんな姿になっても、遠山はまだ仕事に未練があるようだった。そのことを聞いて欲しくて、私を呼び寄せたのだろうか。

「おまえ、仕事で騙されたのか？」

「そうだ。俺は騙された。思い出すと今でもくやしくてならない。狂い死にしたくなるほどだ」

「何があったのか知らないがもうすんだことだ。忘れてしまえよ。妄執を抱き続けていると、額に角が生えて鬼になるぞ」

「でも、忘れられない。体を張っていたからな。なれるものなら鬼になって、あいつらを食い殺してやりたい」

相当悔しい思いをしてきたようだった。それに、遠山は私と違って気性の激しいところがある。思い出すと怒りが

込み上げてきて、誰かに話さなければ気持ちが治まらないのだろう。もしかしたら、これまでにもいろいろな人を呼び寄せて、繰り返し話してきたのかもしれない。それでも悔しくて気が晴れないのだ。誰かに話さなければ悔しさは堪え難いまでに膨らんでいき、それこそ鬼にでもならなければ平常心を取り戻せないのかもしれない。聞いてやらなわけにはいかないな、と私は諦めた。

「おまえは確か、総合商社に勤めたんだよな」

「そうだ。総合社からいろいろな仕事をしていて、俺は農業関連資材を扱う部門へ配属された。横異動の少ない体質の古い会社だから、最初に配属された農業関連がいわゆる俺の畑になった。俺はまじめに働いたし勉強もした。それがいけなかったのかもしれない」

「まじめに働くことがいけないというのか？」

「そうだ。まじめ過ぎてずるさを養うことを忘れてしまったんだ」

「ずるく立ち回るのはおまえの性分には合わない」

「おまえだから理解してくれるが、体質の古い会社にはいろいろな所に落とし穴があつてね」

「落とし穴？」

「そうだ。人を陥れるために存在する落とし穴だ。一度落とされると簡単には抜け出せない。落とされたいためには、自分が穴を掘り、先に誰かを落とすやらなければならぬ」

ろげなイメージを具体的な形にしようとした。間違はなく世の中のためになるという確信もあった。俺はこの仕組みづくりに没頭した。調理済み食品を扱う会社を一社一社回り、肥料や飼料に変換するプラントの設計を依頼し、生産された肥料や飼料を使ってくれる農家を探す。準備は大変だったが、協力者を集めることができ、いよいよ実現へ向けて動き出すことになった。そこに落とし穴が仕掛けられていた

「穴を掘ったのは誰なんだ？」

「俺の上司。最大の理解者だと信じていたのに、生き血を吸うことに長けた妖怪のような男だった。準備が整っていると、自分が事業の責任者になると言い出したんだ。社内ベンチャー制度では年齢に関係なく、発案者が事業を取り仕切る決まりになっている。だから、約束が違う、と俺は抗議した。すると上司は、決まりは決まりでも絶対的な決まりではない、すでに役員会で了承されていることだ、と言いつ張った。結果はその上司の言う通りになり、反抗的な態度を取り続けた俺はプロジェクトから外された」

憎しみを目を輝かせ、手を震わせながら遠山は語っていたが、どこにもありそうな話だ、と私は思っていた。だが、思ったままを話せば遠山は癒されぬ。叱咤激励してみても、ここまで体が衰えてしまった遠山に、再起できるチャンスが巡ってくるはずもない。私が山を下りてわざわ

らないこともある」

「落とし穴に落とされたのか？」

「発端は社内ベンチャー制度だった。俺には温めていた事業プランがあり、応募するとすぐに認められた」

「すごいじゃないか」

「もう十年以上も前のことだけど、時代の要請に応えるための事業だったから」

私には関係のないことだし関心もなかったが、遠山は聞いて欲しそうなので質問した。

「どんなプランだった？」

遠山は目を輝かせた。

「外食産業やコンビニエンスストアが急速に普及して、調理済み食品が大量に回るようになり、膨大な量の食べ残しや売れ残りが廃棄されるといふ問題が発生してきた。それを解決するために、俺は新しい循環システムをつくろうとした。食べ残されたり売れ残った調理済み食品を回収し、肥料や飼料に変換して農家に販売する、そこで栽培された野菜や飼育された家畜は調理済み食品の材料として使用されるというシステムだ」

「どんなものでもうまく循環させれば澄んだ状態を維持できるが、循環が滞ると濁りが生じる。大学時代からおまえが言ってきたことだ」

「そうだ。その通りだ。俺は大学生の時に描いていたおほ

ご会いに来たのは、遠山の遣り場のない気持ちを少しでも和らげ、荒んだ魂を鎮めてやるためなのだ。

「ひどい話だ」

私が理解を示すと、遠山の声は勢いづいた。

「そうなる。ひどい話だろ。しかし、その上司のひどさはそれだけに止まらなかった。冷たく当たるようになっただけでなく、目障りなものだから、俺は支店へ飛ばされてしまった。しかも、噂を捏造して、こいつは扱いにくい男だから注意するようにと、俺が配属される支店の支店長に電話で伝えた。だから、俺は支店へ移っても冷たい目で見られ、そんな環境下ではうまく仕事をすることができない。俺は支店を点々と回され、ひどい時には半年ごとにたらい回しにされた。しかし、本当に悔しかったのはそのことではない。俺の発案したプロジェクトがすっかり骨抜きにされてしまったことだ」

「どういうことだ？」

「調理済み食品のための循環システムは、最初の取っ掛かりに過ぎず、俺は排泄物を含む壮大な循環型社会の構築を夢見ていた。それなのにあいつらは、クリーンな企業イメージづくりに利用しただけで、本当に循環型社会を作ることなど最初から考えてもいなかった。会社の上層部は、経済効率が高く収益性も安定している化石燃料の王国から離脱することなど一切考えていなかったし、妖怪のような俺

の上司はそのことをよく心得ていた。だからこそ、循環型社会の構築によって、最終的には化石燃料王国を解体しようとしていた俺は、邪魔で危険な存在として抹殺されてしまったというわけだ」

遠山を苦しめた上司がどういふ男なのか、私は知らないし、本当に遠山が言うような人間なのかどうかも定かではなかった。何事にも一途な遠山は、適度に他人に合わせるいく術を知らないし、うまく立ち回ることができないし、ひとつのことにこだわる、ほかのものが見えなくなるようなところがある。その上司にしてみれば、非は妥協を知らない遠山にあるということなのかもしれない。しかし、もはや再起不能のように見える遠山に、そのような冷めた見方を伝えるわけにはいかなかった。

「随分、辛い思いをしてきたんだな」

私が同情すると、遠山は額を強ばらせた。

「俺はあいつを呪い殺してやりたい。体に無数の針を突き刺し、何日もかけてなぶり殺してやりたい。しかし、ああいう男はしぶといから、どんな呪いも効かない。ほかの人間を踏みつけにしても、心を痛めることはなく、平然と生きていける人間なんだ」

込み上げてくる憎しみを吐き出すようにして、遠山は話し続けた。そうだ、その通りだ。私は領きながら、静かに耳を傾けていた。あまりにも遠山の憎しみが強いので、本

当に強ばらせた額から鬼の角が生えてくるかもしれないと心配していたが、私が一切反論することなく、理解の気持ちを伝えていくうちに、憎しみの毒を吐き切ることができたのか、遠山の刺々した口調は少しずつ和らいでいき、額の強ばりも薄れていった。

鬼に豹変することなく、落ち着きを取り戻した遠山は力ない声で言った。

「今の俺にできることと言えば、こうして昔馴染みに愚痴話を聞いてもらうことくらいしかない。遠くにいるおまえを呼び寄せてしまつて悪かったな。本当は俺の方から訪ねていくのが筋だが、こんな体になつてしまつて動くことができないものだから」

いまさら嘆いてみてもどうなるものでもないことを、遠山は遠山なりに理解しているようだった。

「悪いだなんて、そんな。友達じゃないか」

「しかし、長い間、会っていない友達だからな。おまえにはおまえの事情があるだろうし」

さっきまでの煮え立つような憎悪は不思議なくらい治まつていた。

「いいんだ。会えて良かったと思つている」

私は本心そう思つていた。

「やはり友達はいいものだ。どこかに落とし穴が掘られてい

るかもしれないと、心配しなくてもいいからな」

穏やかさを取り戻した遠山に私は言つてやりたいことがあつた。

「どんなものでもうまく循環させれば、澄んだ状態を維持することができると。循環が滞ると濁りが生じる。それがおまえの持論だったよな」

「そうだけど、それがどうかしたか？」

「魂も同じじゃないのかな」

「ひとつのことにいつまでもこだわり続けていると、魂も濁り始める。そうは思わないか？」

遠山はしばらく私の目を見つめ、真意を探るように言った。

「おまえ、俺の魂を救済したいのか？」

「余計なことかもしれないけど」

「心配するなよ。俺だつてそのことは考えている。でも、できてしまった魂の凝りを解きほぐすには、それなりの時間がかかる。こうして落ち着いてきた気持ちも、おまえが帰ってしまったら再び煮えたぎり始めるかもしれない。しかし、俺は俺なりに自分の魂の状態を把握しているつもりだ。俺だつて魂はできるだけ軽くしておきたいからな。できることなら、風にあおられて羽のように舞い上がっていきけるくらい、軽やかな魂でいたいと思つている」

遠山はしみじみ言い、それから私を見つめた。

「おまえも、聞いて欲しいことがあるんじゃないのか？」

私は心の中を読まれたくなくて目を逸らした。

「いろいろあつたけど、いまさら話してどうなるものでもないから。今は誰もいない奥深い山の中の廃村で一人で暮らしている」

「そんな所で暮らしていけるのか？」

「昔畑だった所に自生している野菜が採れるし、野生化した鶏の卵を採ることもできる。木の実もなるし、川で魚や蟹を採ることもできる。水も豊富にある。生きていこうという気さえあれば生きていける所なんだよ」

「そんな生活を選ぶなんて、おまえも大きな落とし穴に落とされたんだな」

「もう、そのことはいいんだ」

「怒りが込み上げてこないのか？」

「遠山とは違うから」

「穴に落とされた奴らが憎くないのか？」

「憎いけど、激しい怒りになつていかない。落とされた穴の底から、穴の外を見上げていることしかできない。性分なんだろうね」

「そういう奴だったよな、おまえは」

私が何も言えないでいると、遠山は溜め息をつくように言った。

「俺たち、大学生の頃が一番良かったのかもしれない」

振り返ってみればそうかもしれないが、当時はそうは思っていない。私も遠山も充分な仕送りをしてもらえる境遇にはなかったからだ。住んでいた辺りには工場や倉庫が密集し、二人でよくアルバイトに出掛けた。給与がいい分だけ労働環境が悪く、遠山はいつも怒りを顔にして、食べる物も切り詰める暮らしを続け、狭いアパートから抜け出せる日が一日でも早く来るのを願っていた。

そんな学生生活にも楽しい思い出があった。下宿しているアパートの隣に大家の家があり、そこに幸子という女の子がいた。私が住むようになった時は中学生だったが、出ていく時は高校生になっていた。

アパートには十二人の大学生が暮らしていたが、幸子はなぜか私と遠山に親切だった。私か遠山のどちらかが好きだったのかもしれないし、とりわけ暮らしぶりの貧しかった私と遠山に同情していたのかもしれない。

幸子は二人のためによく料理を持ってきてくれた。幸子の作った弁当を持って、三人で近くの川原へピクニックに行ったこともあった。優しくて笑顔が可愛かった。

「そう言えば、さっちゃん、どうしてるかな」

尋ねると、遠山は首を傾げた。

「おまえ、知らなかったのか？」

「父親の借金のことが尾を引いていたのかもしれない」

「穴があまりにも深く、這い出せなかったというわけか」

「招霊寺という寺に墓がある。せつかく山を下りてきたのだから参ってやるよ」とい

「ああ、そうするよ」

私はそれ以上言葉が出てこなかった。遠山も何も言えないでいる。

招霊寺は山の麓にあった。頭上を覆う樹木が風に騒ぎ、そこだけがぼっかり空いている境内に人の気配はなかった。砂ぼこり色に変色している御堂の裏側に竹藪があり、竹藪に挟まれた細い道を上がっていくと、山の斜面の切り開かれた所に墓地があった。

墓石の間に立ってこちらを見ているものがいた。川原で見掛けた嘴と脚の長い二羽の白い鳥だった。私を見詰める鳥の目はやはりなつかしい誰かの目に似ていたが、誰なのかは思い出すことができない。歩み寄っていくと、二羽の鳥は大きな翼を広げて飛んでいった。

墓地にいたのは私だけになり、語り掛けてくるのは墓石に彫り込まれている文字だけだった。遠山の話によれば、幸子は結婚して富須原という姓になった。私は墓石の文字を見て回った。富須原と記してある墓石はひとつしかなかった。磨かれた石の側面に幸子の名前がまだ真新しく刻

「さっちゃん、どうかしたのか？」

「高校を卒業すると、三十も年上の男と結婚させられた」

「三十も年上の男？」

「あの大家、金にだらしない男だったので、莫大な借金を作ってしまった、金貸しにさっちゃんを差し出したんだ。金の怖さを知らないのん気な奴って案外たくさんいるし、大家もそういう人間のひとりだった。大学を卒業してしばらく経った頃、懐かしくて大家の家を訪ねたら、さっちゃんの母親が泣きながら話してくれたんだ」

「さっちゃんは金貸しの家に住んでいるのか？」

「住んでいたけど、今はもういない」

「もういない？ どこへ行ったんだ」

「本当はどこかへ行き去ったのだらうが、どこにも行かないで死んでしまった」

「死んだって、あのさっちゃんが？」

「自殺したんだ」

「自殺だなんて、信じられない」

「検死した時、体中に無数の傷跡があったと近所の人たちが噂していた。さっちゃんも深い穴に落とされてしまったんだ」

「無数の傷跡？ 金貸しの旦那によるものなのか？」

「おそらくそういうことだろう」

「逃げ出せばよかったのに」

まれていた。

ここに幸子が眠っている。しかし、私が知っているのは中学生から高校生にかけての幸子だった。幸子は私のことをお兄ちゃんと呼んでいた。私は妹のように可愛く思うことがあった。あの幸子が三十歳も年上の男に結婚を強いられ、どのような暮らしをしてきたのか、想像することができなかった。

墓石の前にしゃがんで手を合わせた。閉じた目蓋の裏側に幸子の面影を呼び覚まし、できることなら昔のようにお兄ちゃんと話し掛けて欲しかった。しかし、私に死霊を呼び寄せる力はない。見えるのは目蓋の裏側に広がる暗闇であり、聞こえてくるのは物悲しい蝉時雨だけだった。

祈り終わって目を開き、立ち上がると、いつからそこにいたのか浴衣姿の少女が立っていた。紺地の浴衣には赤い朝顔の花が咲いている。少女の顔はつややかで、髪を結い上げ、手に持っている水の入った木桶には白や黄の菊の花がさしてあった。

少女は不思議そうに首を傾げた。

「どちらさんですか？」

私は戸惑いながら答えた。

「怪しい者ではありません。昔よく知っていた人がここに眠っていると聞いたものですから。この墓石に名前が刻んである幸子という人です」

「母のお知り合いなのですね」

「母……。では、あなたは」

「娘のゆかりと申します」

「ゆかりさん。さっちゃんに娘さんがいたなんて」

私は思わず顔を見詰めてしまい、ゆかりは恥ずかしそうに言った。

「私の顔に母の面影、ありますか？」

しばらく眺めていたが、初対面の少女の顔を見詰め続けるわけにはいかなかった。

「よく分かりません。あまりにも遠い昔のことなので、記憶も曖昧ですから」

ゆかりは失望したように呟いた。

「やはり似ていないのですね」

傷つけてしまったようで私は心配になった。

「いえ、そういうわけでは……」

「いいんです。私、父親似だつてよく言われますから」

「でも、声は似ています。こうして話していると、幸子さんの声を思い出します」

「そんなに似ていますか？」

ゆかりはうれしそうに言った。

「ええ、似ています。あなたの声は間違いなく幸子さんの声です。あなたの声を聞いているうちに、顔も少しずつ思い出せるような気がしてきました。それに、私の知ってい

る幸子さんは、ちょうどあなたと同じような年頃でした。

夏にはあなたのように浴衣を着て、髪を結い上げ、うちわを持って庭で夕涼みをしていました。私がアパートの二階の窓から覗いているのを見つけると、下りてきませんか、と誘うんです。私は仲のいい友人と二人で下りていきます。

すると、幸子さんは冷蔵庫からよく冷えている瓜を出してきてくれるのです。私と友人はいつも腹を空かせていましたから、夢中になって瓜を食べ、幸子さんはその様子を楽しそうに眺めているのです」

「母が幸せだった頃のお知り合いなのですね」

やはり幸子は結婚して幸せになれなかったのだ。幸子がどういふ暮らしをしていたのか知りたかったが、不幸だった暮らしを娘の口から聞くわけにはいかなかった。

「誰にとつても、若い頃の思い出はいいものですから」

私は何気なく言ったのだが、ゆかりは顔を曇らせた。

「若い頃の楽しい思い出があるだけ、母は私よりも幸せだったのですね」

ゆかりは下を向き、うつすら涙を浮かべた。

「ゆかりさん、あなたは……」

思わず言ったが、それ以上言葉が出てこなかった。私は女の人の扱いに長けた男ではなく、ましてや涙を浮かべている少女にどのような言葉を掛ければいいのか、戸惑うばかりだった。

ゆかりは私の困惑に気づき、涙を拭いながら言った。「すみません。気になさらないでください。それよりも、母のためにもう一度、祈っていただけませんか」

「ええ、それは喜んで」

ゆかりと私は花を供え、墓石を水で清め、並んで手を合わせた。目を閉じて祈りながら、私はおかしなことを考えていた。さつきは折り終わって目を開いた時、どこから現われたのか、ゆかりが立っていた、今度は目を開いた時、ゆかりは姿を消しているかもしれない。だが、そんなばかばかしいことがあるはずはない。そう自分に言い聞かせながらもなぜか気掛かりなので、私はそっと目を開いて様子を窺った。ゆかりは間違いなく私の隣で祈っていた。

山門を出て石畳の道を下っていったが、ゆかりがどちらの方へ帰っていくのか、私に分かるはずもなく、別れの挨拶をするために振り返ると、ゆかりは寂しげな目で私に言った。

「これからどちらへ？」

「どこか決めているわけではありませんが、とりあえずは駅前大通りへ出てみようかと思っています。ではこれで」

一礼し、心惹かれるものを断ち切って歩き始めると、ゆかりが追い掛けてきた。

「じゃあ、私も」

私は足を止めた。私を見詰めるゆかりの丸い頬はつややかで、額には小粒の汗が浮き出ている。小さく閉じたくちびるは今にも散りそうな花びらのようだった。そのくちびるが恥かしげに開いた。

「いけません？」

私に断る理由はなかった。

「いえ、かまいませんが」

ゆかりのくちびるが笑顔に崩れた。私は微笑み返し、再び歩き始めた。ゆかりはうれしそうに寄り添ってきた。私は娘と歩いている父親のような気分になることができた。しかも、歩いているうちに、以前にもこういう気持ちになったことがあるような気がしてきたが、いつのことで、寄り添ってきたのが誰だったのかは思い出すことができなかった。雲に覆われた空は暗さを増している。夕暮れ時が近いのだ。

駅前大通りのアーケードは、おびただしい数の華やかな装飾物が天井から垂れていて、見上げながらゆっくり歩いていく人で混雑していた。

「随分、人が多いですね」

私が独り言のように呟くと、ゆかりは言った。

「今日は特別ですから」

「何かあるのですか？」

「送り火の日ですから」

「送り火の日？」
「山で薪や松葉を燃やして、夜空に文字を浮かび上げさせる伝統行事です」

「大文字焼きですか？」

「大文字焼きという言い方が多いようですが、『大』という文字の上に飛び出た所が頭、横の一直線が両手、下に二本伸びているのが両足というように、人間の形に見えるので、この辺りでは『人燃やし』と呼んでいます」

「人燃やしだなんて、何だか恐ろしい言い方ですね」

「そうです。恐ろしい言い方です。昔は本当に生きた人間を燃やしたという言い伝えもあるそうですから」

「まさかそんな」

「子供の教育に悪いという理由から、口に出して言う人は少なくなりましたが、でもこの街のみんなが知っていることです。薪や松葉と一緒に裸にした男を並べて燃やしたというのです。だから、薪や松葉を並べる場所を掘っていくと、今でも人骨が出てくるそうです」

「でもなぜ、生きている人間を燃やしたのでしょうか」

「詳しいことは知りませんが、呼び水のようなものだったという話を聞いたことがあります」

「ポンプなどから水が出てこない時、少量の水を注いでやると出てくるようになるという、あれですか？」

「そうです。送り火は、山の中腹で大きな炎を上げること

「ここが一番よく見えると聞いてきたのですが」

老夫婦は一枚の紙を見せながら、さつきから半袖シャツのバスの案内人に尋ねている。案内人は首をひねり、額に皺を寄せている。

「この地図はどこで？」

「この街へ来る前に息子がコンピュータで調べてくれて」

「誰かのホームページに載っていたのですね」

「難しいことは分かりませんが、ここならそれほど人も多くないし、よく見える穴場だと言っています」

「これはおそらく、送り火を見に来た人が自分の体験に基づいて作った地図ですね。仮に去年の体験だとすれば、それからちょうど一年経っているわけですから、まるで見えなこともあるし、何とも言えませんね」

「そうですか。見えないこともあるのですか」

老夫婦ががっかりしたように言うのを見て、私はゆかりに言った。

「送り火を見るのもなかなか大変ですね」

「素敵な穴場を見つけたら、翌年以降に訪れる人たちに伝えたいくなるから、自慢のお薦めスポット情報はどんどん増えているんです。でも、街には新しい建物が増えていますし、遠いお山の炎を見るわけですから、一年の間にマンションなどが建って見えなくなることもあるんです」

「では、どこへ行けばいいのですか？」

によって、地上をさまよい歩いている霊魂を呼び寄せ、天上へ無事送ってやるためのものですが、できるだけたくさん霊魂を呼び寄せるには、呼び水のような役割を担う霊魂が必要だということです。だから、地上に悪い霊魂が溢れ返り、飢饉が起きたり、疫病がはやって来た時には、地上にはびこる悪い霊魂を一掃するために、いつもよりたくさんの方が燃やされたということです」

あまりにも恐ろしい話なので、私が返す言葉を見つづけないでいると、ゆかりが言った。

「せっかくだから、夜の間に燃え上がる文字を見ていかれませんか？」

「そうですね。せっかくだから」

「だったら、よく見える場所を探さない」と

ゆかりが歩き始め、私はその後に従った。アーケードを出ると、沈んでいく太陽が空を覆う雲の下まで来ていて、厚い雲の下側を赤く染め上げている。もうすぐ、深い夜の闇がやって来るのだ。そそり立つビルも、その間を縫うように通り過ぎていく車も人も、光のない静けさの中に深く沈んでいく。眠っていた霊魂が目覚まし、夜行性の怪物が歩き回り、物の怪の飛行が始まる時がやってくるのだ。

しかし、雑踏の中は賑やかで、霊魂も怪物も物の怪も近づくとはできそうにない。リュックサックを背負っているあの老夫婦のように、おそらく困惑しているだろう。

「たくさんの方が集まる場所のほうが、やはり間違いが少ないと思います」

日が遠くに落ちていき、地上は夜の闇に覆われた。道路の片側に並ぶ店がまばゆい光を放ち、歩道には人が賑やかに行き交っている。コンビニエンスストアの駐車場には露店が設けられ、法被に鉢巻き姿の人が大声で冷えた飲み物や手軽な食べ物を売っている。隣のレストランでは店の前に机と椅子を並べて、ここならばビールを飲みながらよく見えますよ、と呼び込みをしている。話したくても周囲の声に掻き消され、言葉を聞き分けるのが難しそうなので、私とゆかりは無言で歩いていた。

久しぶりの雑踏に心を奪われて、私は何も考えることなく歩いてきたが、そのうちにさつきから同じ区間を行ったり来たりしているのに気づいた。ほかの人たちも同様の動きをしている。要するに、同じ区間の往復を繰り返す人の流れに飲み込まれ、逆らうことなく同じように動いていたのだ。私はゆかりの耳元に口を近づけた。

「なぜ、同じ場所を行ったり来たりしているのですか？」

「八時になると『大』の文字の炎が見え始めますが、わずか十数分で燃え尽きてしまいます。一年間、待ち続けている貴重な時間がすぐに終わってしまうのです。ここに集まっ

ている人たちは、時間は短くてもできるだけ多くの魂が鎮められるよう、祈りながら歩き続けているのです」

言われてみれば確かに、歩いているどの人も何かを唱えながら歩いてきた。だが、私はどのように祈ればいいのか分からなかった。ほかの人たちと同じようにしたかったのだ、私は祈りの言葉を尋ねるためにゆかりの顔を見た。ゆかりも私を見ようとしていたらしく、目と目が会った。恥ずかしく、緊張もしたが、ゆかりから目を逸らすことができなかつた。こういう時には何を言えればいいのだろうかと考えていると、先にゆかりが言った。

「歩くのに疲れました？」

よく聞こえなかつたが、口の動きを読み取ることができた。

「ええ、まあ」

「では、この辺りで『大』の文字が見えるのを待つことにしましょう」

言われてみれば、全員が祈りながら歩き続けているわけではなかつた。道路の店が並んでいない片側に立ち止まって、遠くを眺めている人たちがいた。私はその人たちの後ろに立ち、同じ方向に目を向けた。おそらく畑が続いているのだろう。遮る物のない暗い空間が続いていて、夜空の下にひととき黒いならかな山の稜線が見えていた。あの山のどこかに『大』の文字が浮かび上がるのだろうか、ど

同じことだ。防ぎたくても防ぎようがなく、苦痛と絶望の沼底へ引き摺り込まれてしまうのだ。できるのは、常日頃から用心するくらいのことだ。少しでも危険な臭いのする場所には近づかないことだ。

人が増えてきたが、それでも人は増え続け、身動きできないままになってきた。店の中にいた人も道路へ出て、ひとつの方向を眺めている。中には平安貴族や武士の衣裳を着ている人たちがいた。江戸時代の町人風の人も、ぼろ布を縫い合わせた衣をまとっている僧侶も、体中に矢を射込まれた鎧武者もいた。どの顔も青白いのは衣裳に合わせて施された化粧のせいだろうか。盆地の底の古い街にはいろいろな人がいるものだ、と思いつつ溢れ返る人波を眺めていると、一斉にどよめく声が聞こえてきた。

私はほかの人たちが見ている方に目をやった。遠い山に赤く輝く『大』の文字が出現しようとしていた。ふいに懐かしく切ないものが目の前に現われたような気持ちになり、息をするのも忘れて、そのまま遠くの炎に身も心も吸い寄せられていく感覚にとらわれた。見詰めていると、『大』の文字のまばらな所が埋められていき、くつきりした文字が浮かび上がってきた。私は心の中に静けさが広がっていき、くを感じながら、うっとりとして眺めている。遠くに見える小さな赤い文字が何かを語り掛けているようにも思えた。

その声が聞こえているのか、私の前に立っている老人が

のポイントなのかまでは判断できなかった。

私は周囲を見回した。一人の若い男が中年の男女に熱心に説明していた。中年の男女は領きながら聞いている。おそらく、若い男はこの街で下宿生活をしている学生で、中年の男女は送り火を見に来た両親なのだろう。仲の良さそうな親子で、息子を見つめる両親の目にはほのほとしたものが漂っている。あんなに大きくなって、親というのは子供が可愛くてならないのだ。

反対の方向からは浴衣姿の五人の家族が歩いてきた。若い夫婦と小学校低学年の男の子と女の子、もう一人はおそらく祖父だ。子供たちの弾けるような明るさから、この家庭でも子供を大切にしていることが分かる。朝になれば二人の子供はランドセルを背負って元気に家を飛び出していく、誕生日には純白のクリームの上に赤い苺ののったケーキに子供の年齢の数だけ蠟燭が灯される。ファミリーレストランへ行けば、子供たちは口の周りを汚しながらハンバーグやスパゲティを食べるのだ。

だが、堅い絆で結ばれている親子でも堪え難い不幸に見舞われることがある。しかも、危険は突然やってくる。妻や子供たちを襲う災難を振り払うことができず、自らの無力を知った時、あの若い夫は最後の力を振り絞って必死の抵抗を試みるだろうか。それとも、絶望の果てに自ら命を断とうとするのだろうか。暗闇の中だけでなく、白昼でも

『大』の文字に向かって深く一礼し、手を合わせて前方を凝視した。老人の顔が上下に動いている。炎とともに次々に上空へ昇っていくものを目で追い掛けているかのようだった。老人の見えるものが見たくなり、私も目を凝らしていると、暗闇の中を白濁した筋状のものが流れていくのが見えてきた。筋状のものはおびただしい数の小さな点の集まりであり、炎の輝きに吸い寄せられるようにして山の方へ流れていき、燃え上がる炎に清められて、澄んだ青白い粒子となって上空へ舞い上がっていく。さまざまに重苦しいものが焼き尽くされ、限りなく軽やかに山の上の彼方へ飛散していくことができるのだ。飛散していったものは風とともに上空を漂い、雨に誘われて地上に降り注ぎ、再び新しい生命の中に宿ることになるのだ……。

そんな情景を思い描いているうちに、あんなに輝いていた炎も燃え尽きていき、所々に明滅するわずかな光を残して文字の形はなくなつた。炎が弱まっていくにつれて集まっていた人もまばらになつていった。

「もう終わってしまったんですね」

何を考えているのか、しばらくしてゆかりは呟いた。

「まだ、終わっていない人もいます」

「どういうことですか？」

「この世に愛する人がいて、その人と別れたくない思いが強かったり、会いたい人がいるのにまだ会えなくて、気持ち

ちの整理がつかず、この世に強い未練を残している人たちです。精霊となつて向こうの世界へ帰っていかば、この世で暮らした人としての記憶がなくなってしまうかもしれないからね。愛する人の顔も忘れ、会いたい人への切ない思いも消えてなくなってしまうかもしれない。そうなることが遺る瀬のないのです。そういう未練を残している濁りのある魂は、また一年間この世をさまよい続け、未練を断ち切れるかどうかの試練に耐えなければならぬのです」

そう言いながら、ゆかりは私の腕を抱え、頭をもたせ掛けてきた。ゆかりの温もりと頭の重みが私の肩に伝わってきた。私が未練を残した濁りのある魂であつたとしても、ゆかりと一緒にならば、この世をさまよい続ける辛さに耐えることができるかもしれないのだ。

やがて周囲の人々はいなくなり、店の人たちは後片づけと閉店の準備に取り掛かり、目の前の暗い空間には黒い山の稜線だけが見えている。そろそろ、帰ろうか。私はそう言おうとしてゆかりを見たが、ゆかりはいなかった。肩にはまだゆかりの温もりが残っているのに、ゆかりの姿はどこにもなかったのだ。

「では、あなたが」

初対面のはずなのに、僧侶は私のことを知っているように言った。私は首を傾げた。

「幸子さんがよく話してみえましたから」

「私のことをですか？」

「そうです。父の家には学生アパートがあつて、そこにまるで兄弟のように親しくしていた二人の学生さんが住んでいたと、懐かしそうに何度も話してくれました」

私を懐かしがる幸子のことを思うと悲しかった。

「結婚生活は幸せなものではなかったようですね」

「借金を棒引きにする代わりに三十歳も年下の娘を嫁がせる。そんな男との結婚が幸せであるはずがありません。夫が示したのは愛情ではなく、剥き出しの欲望でしたから。夜は夜で責め苛まれ、昼間は昼間で扱き使われる。女の不幸を一身に背負つたような暮らしでした」

「幸子がそんな辛い生活を強いられていたなんて、私は今日まで知りませんでした」

「今日まで？」

「そうです。病気の友人を見舞い、ここで幸子の娘のゆかりに会つて、幸子について話しました」

「ゆかりさんに会われたのですか？」

「ええ、会いました。二人で送り火を見に行き、楽しいひと時を過ごすことができました」

て手を合わせている。祈り続けている人の背中は暗闇に溶け入つてしまふようなほど儂げで、死んでいる人が墓の中から脱け出して何かを念じているようにも見えた。

私はゆかりがどこに住んでいるのか知らなかった。しかし、出会つたのはこの墓の前であり、ゆかりの母親が眠っている。だから、墓前で祈り続けている人のように、ゆかりがもう一度ここへやつてくる可能性はあつた。

私は待つていた。だが、ゆかりは現われなかった。墓地には一人の黒衣の僧侶がいて、祈り続けている人に呼び止められ、低い落ち着いた声で経を上げていた。この寺は幸子が嫁いだ富須原家の菩提寺だから、僧侶に尋ねればゆかりの家がどこにあるのか、教えてもらうことができるはずだ。僧侶が近くに來たので、私は声を掛けた。僧侶は足を止めた。

「何か？」

「お尋ねしたいことがあるのですが」

蠟燭の放つ灯りが初老の僧侶の顔の上に揺れている。

「あなたは？」

「ここにある幸子の墓に手を合わせるために遠くからやつて來た者です」

「幸子さんの？」

「そうです。私が大学生の頃、親しくしていました。幸子の父親が所有するアパートに下宿していたのです」

「それは、それは」

「でも、いなくなつてしまつたのです」

「いなくなつた？」

「送り火が消えて、気づいた時にはゆかりは姿を消していったのです」

「それで、あなたはゆかりさんをお探しなのですか？」

「そうです。もう一度、会いたいのです」

僧侶はしばらく考える仕事をし、静かに口を開いた。

「それは難しいでしょう」

「難しい？ もう会えないということですか？」

「おそらく」

「そう言わないで、ゆかりの家がどこにあるのか教えてくください。ゆかりの家の住所をご存じなのでしょ？」

「家へ行けばなおさら会うことはできません」

「家に住んでいないのですか？」

「そうです」

「では、ゆかりはどこに？」

「いるとすれば、あなたの目の前に」

「私の目の前？」

「そうです。この墓の中に」

「まさか。だって、私は今日、ゆかりと会つたのですよ。」

それに墓石には……」

そう言いながら、私は富須原家の墓石を確かめた。どう

いうわけか、幸子の名前の横にゆかりの名前が刻み込まれていた。私は自分の目が信じられず、ふたつの名前を見つめてみると、僧侶はやさしく尋ねた。

「ゆかりさんは楽しそうでしたか？」

「お父さんだったら良かったのに、と何度も聞かされていた人に一度は会ってみたい。そんな思いを募らせていたのです」

「ええ、とても」

「二人でいる時、確かに私はゆかりを娘のように感じていました」

「それは良かった。おそらく、この世に残す未練が消えたのでしょうか？」

「ゆかりさんも酷い最後を遂げられましたからね」

「ゆかりも？」

「では、ゆかりは」

「そうです。父親に犯され、それで命を断ったのです」

「まさか。ゆかりにそんな不幸の影はありませんでした」

「もう、この墓の中にはいないと思います。墓の中に眠っているのは、ゆかりさんがこの世に生きたことの証、すなわち遺骨だけです」

「それはあなたと一緒でしたからです」

「私と過ごすことが慰めになったというのですか？」

「ということは、私はもうゆかりに会うことはできないのですね」

「長年の夢が叶ったわけですから」

僧侶は慰めるように言った。

「ゆかりが私に会うことを夢見ていたと」

「楽しいひと時でしたか？」

「そうです。母親の幸子さんがよく話していたのです。あなたのおじいちゃんが持っていたアパートに、やさしい学生さんが住んでいた、母さんはとても楽しかった、あの学生さんがゆかりのお父さんだったら良かったのにね、というように。辛い生活を強いられていた幸子さんにとって、あなたたちとの思い出だけが心の支えだったのです」

「だから、ゆかりは……」

「どれだけ時が経っても未練が残り、旅立つことのできない亡者が、送り火に引き寄せられてやって来るのです。こ

の街の周辺からだけでなく、もつと遠くからも、誰かに呼ばれるようにして、おびただしい数の亡者が集まってくるのです。亡者たちは、できることなら送り火とともに遥か彼方へ旅立っていきたいのですが、重い未練の鎖に縛られていれば、見物している生者とともに、送り火の輝きを遠くに眺めていることしかできないのです」

「でも、なぜ私に亡者の姿が見えたのでしょうか？」

「さあ、なぜでしょう。それは、あなたもまた亡者だからかもしれませんね」

「私が亡者？」

「私には分かりませんが、もしあなたが亡者ならば、そのことはご自分が一番よく分かってみえるはずですよ。それでも分からないとおっしゃるのなら、それは事実を遠ざけようとしているからでしょう」

「違います。私は死んでなんかいません。私は一人で山中に暮らしているのです。自然に開かれた素晴らしい生活です。ごみごみしたところもなく、憎しみや悲しみもない平穏な毎日です。私は山から離れたくなかった。ずっとそこにいたかった。でも、友人の遠山に呼ばれたのです。病気になるってどうしても会いたいというので、わざわざ山から下りてきたのです」

「亡者が亡者と呼んだのかもしれないね」

「遠山も死んでいるというのですか？」

「あなたには、そのこともよく分かっているはずですよ」

「分かりません。私にはあなたが何を言っているのか、まるで分かりません」

「その遠山という方の魂はこの世に強い未練を残している。しかし、それだけでなく、さまざまに続けるもうひとつの魂のことが気掛かりだった。それがゆかりさんの魂です。ゆかりさんの魂はさんざん苦しみ抜き、最後には実の父親に犯された苦痛を癒すことができた。あんな男のために死んだ後までも縛られ続けるのはつまらないと考え、恨みを断ち切ることでできたのです。それでも、この世に未練が残った。母親の幸子さんがいつも言っていた人、あなたのお父さんだったら良かったのにね、と言っていた学生さんに一度でいいから会ってみたい、会って親子のようなひと時を過ごしたいという未練です。遠山さんというお方はそんなゆかりさんの願いを知っていた。だから、送り火の日にあなただけを呼び寄せたのです」

私は背後の支えがなくなり、そのまま深い穴の中へ落下していくような感覚にとらわれていた。

「ゆかりは二人だけの時を過ごせたことに満足して、送り火とともに旅立って行き、私はこの世に取り残されてしまったというわけですか」

「でも、あなたは一人取り残されたわけではありません。乱れた心を鎮め、真実をしっかりと見詰めれば、優しい二つ



津田一孝

つだ かずたか

1947年生まれ
名古屋市出身
1971 関西学院大学文学部仏文科を卒業
中部経済新聞社入社 経済記者となる
2007 定年退職
1984 から「作家」（現在「季刊作家」）同人

（「季刊作家」86号より転載）

私は一礼した。僧侶は私に向かって手を合わせ、静かに目を閉じて、低く響き渡る声で祈り始めた。山の中のせせらぎのような経の調べが、私の心の中へ流れ込んでくる。長い間こびりついてきた硬いものが剥がれ落ちていく心地よさを感じながら、顔を上げると、いつからいたのか、僧侶の背後に嘴と脚の長い二羽の白い鳥が立っていた。二羽の鳥は親子であり、一羽の目は妻の目に、体の小さいもう一羽の目は娘の目に似ていることに、私はようやく気づくことができた。

前の車のドアが開いて、四人の男が降りてきた。振り返ると、後ろの車からも三人の男が降りてきた。男たちは誰もが黒い服を着ていた。私は身の危険を感じたが、挟まれているので車を動かすことができず、ハンドルにしがみついていると、男たちは車のドアを開き、私を引き摺り出して、近くの廃屋へ連れていき、この時を待っていたかのようになり、外からは妻と娘の泣き叫ぶ声が聞こえてきたが、私はどうすることもできなかった。

の魂が身近な所に来ているのを理解できるはずです」僧侶の言葉が心の奥に深く沈んでいる魂を刺激し、巻きついている糸を剥がしていくようにして、ひとつの記憶が呼び覚まされた。そうなのだ、と私は思った。私には幸福な家庭があり、気配りのできる利発な妻がいて、十五歳になったばかりの一人娘がいた。ある日、私は親子三人でドライブに出かけた。かつて祖父母が住んでいた廃村が懐かしくなり、急に見たくなつたからだ。細い山道を車で登っていき、廃村に入ると一台の車が止まっていた。道が細いので、動いてくれなければ前に進むことができない。クラクションを鳴らしてみたが、車は動いてくれないし、人が降りてくる気配もない。どうなっているのだろうと思っていると、後ろからもう一台の車がやってきて止まり、私の車は二台の車に挟まれた。

さんざん暴行を加えられて這うことすらできなくなつた私は、首に縄を巻かれて吊された。体の重みで首が締め上げられていく苦痛の中で、叫び声の聞こえなくなつた妻と娘のことを心配しながら、私はおそらく息絶えた。だが、殺されて肉体的苦痛から解放されたはずなのに、私は連れ込まれた廃屋から出ることができなかった。目の前にはひどく傷つけられた私の遺体が吊されていて、長く伸びた脚からは汚物が滴り落ちていた。外を覗くと、恨みで強ばつた額から角を生やし、鬼の姿になつた妻と娘が車の走り去つた方へ向かって歩いていく。おそらく、語り尽くせないくらい恨みを込めて復讐するためだろう。

だが、私は鬼になることができなかった。あの心の乾き切つた粗野な男たちを恨むことよりも、危険な廃村へ家族を連れてきた自身の軽率さを責めていたからだ。

私は悔いる気持ちを込めて言った。

「どうやら、私は死んでいるようです」

「あなたが今思い出された記憶が真実なのか、それとも妄想に過ぎないのか、私には分かりませんが、どちらでもいいことです。生死に関わらず、荒んだ魂や投げ所のない魂を慰めるのが私の大切なお務めだからです。私は亡くなられた方のために経を読みますが、生きている人のために読むこともあるのです。悩みを抱えてみえるあなたにも読んで差し上げたいのですが」

ミネルバ書房

親鸞

主上臣下、法に背く

末末文美土著

自力とは、他力とは、菩薩とは…
戦う念仏者、その思索の軌跡。

ミネルバ書房

親鸞

Shinran

三田誠広

煩悩具足の凡夫・悪人に極楽往生を約束した日本仏教の革命児!

ミネルバ書房 2800円+税

作品社 2600円+税

書くことに情熱を抱いて

『季刊作家』の前身である『作家』は、『確証』で芥川賞を受賞した小谷剛氏が主宰していた文芸同人雑誌である。名古屋を拠点とし、東京、神奈川、山梨、群馬、大阪に支部を設け、日本全国に同人、会員がいた。『作家賞』も設けられ、多くの書き手の目標であり、励みにもなっていた。

小谷氏のカリスマ性は圧倒的であった。『作家』は全国有数の文芸同人雑誌となり、優れた書き手がしのぎを削っていた。小谷氏もその経歴や実力を考えれば中央文壇に進出し作家活動もできたと思われるが、名古屋で医者をしてながら、毎月雑誌の発行に精力を注ぎつづけた。

一九九一年に小谷氏が亡くなり、『作家』は終刊となった。発表の場を失った同人たちは、他の同人誌に書く場を求めたり、気の合う者同士で新たに雑誌の発刊を試みたりしていた。暗中模索のなかで、同人の半数余りが再出発を希望し、一九九二年（平成四年）の春、『季刊作家』の創刊号が発行された。小谷夫人の意思により、『作家賞』も引き継がれた。

しかし、小谷氏ほどの求心力はなく、主宰がしばしば変わって不安定な状態であった。このことは、雑誌作りがいかにかに難しいことであるかを証明している。

それでもなんとか『季刊作家』は年四回発行された。『作家』を引き継ぐ形で、小説を中心に、エッセイ、詩が掲載されている。発行部数は、四百〜五百部。同人数三十名余、会員数二十名余。本年の春に第八十七号を発行し、依然として全国有数の文芸同人雑誌に変わりはない。毎月同人雑誌評にも取り上げられている。これは同人の努力と小谷氏の指導の賜物である。

小谷氏の著書に『小説入園』という小説の書き方の基本をわかりやすく説いた小冊子がある。その中に書かれている、書き直し（推敲）こそ上達の秘訣であること、先入観・固定観念、経験主義による独断におちいつてはならないこと、同人雑誌の書き手であることに誇りを持つこと、書きつづけることが前に進むことであるなどの教えは、小説を書く同人の中に息づいている。

どの同人雑誌も悩みがあると思われるが、『季刊作家』はこの十年、若い人の加入がないこと、同人の高齢化と同人の減少が悩みのタネとなっている。原稿の集まりが悪いのもさることながら、資金繰りも苦しくなっている。そのため雑誌の発行も、昨年から年四回から年二回に減少した。

小谷剛氏の遺志を継ぐ

書くことに生き甲斐を持つ人のために

季刊作家

こうした事情から、同人費や掲載料を値上げする案も浮上している。そうすれば年金生活者が多いために、退会する同人があるのではないかと懸念される。また、雑誌の体裁を落とし、経費を抑えることも考えたが、現在の雑誌の体裁によって書く気になるといふ同人も少なくない。体裁により自身を充実させることの重要性は理解しているけれども、体裁を保てば、おのずと書き手の精神が刺激され、充実した誌面になると考える同人も多いのである。

現状を打破する妙案はない。当面はいまの方向で進んでゆくことになるであろう。

昔は、同人雑誌で小説修業した地道な作家もいたようだが、『作家』の同人の中にもプロの作家になった人もいた。いまは文芸雑誌の文学賞に応募して、入選して作家デビューを果たすというパターンが手っ取り早いしほとんどである。大手の出版社の純文学雑誌の読者が減少し、赤字つづきらしいが、そのわりには新人文学賞への応募は昔と変わらなほど多いようだ。この事実を見れば、文学の道を目指す人は昔もいまもそんなに差があるわけではない気がする。ただ同人雑誌に掲載された小説が新人文学賞に入選したほうが、世間の目に留まるのは明らかである。そのために応募する人はそんなに減っていないのであろう。

この先、文学はどのような道をたどってゆくかわからない。価値観の多様化がすすみ小説家になることはますます

険しくなるのではないか。しかし、同人雑誌に集う人たちは、書くことに情熱を抱いている人たちである。

『季刊作家』は、書くことに生き甲斐を持つ人のために、また同人や会員、そして一般読者のためにも発行を続けたいと思っている。

(祖父江 次郎)



合評会后、居酒屋「こたに」の前で

〒495-0013

季刊作家

愛知県稲沢市祖父江町二俣上川原 84-2

TEL 0587-97-5472